森　鷗外「與謝野晶子さんに就いて」と火星学者パーシバル・ローエル(1)

中崎昌雄

はじめに
1. 森　鷗外の天体観望「観象」
2. 鷗外　めさまし草「たけくらべ評」
3. 鷗外「沈黙の時代」
4. 與謝野晶子と「明星」創刊
5. 夏目漱石「我輩は猫である」
6. 新詩社「明星」最終号
7. 「スバル」創刊と石川啄木
8. 平塚明子と「煤煙」事件
9. 鷗外の文壇復帰第一年目
10. 慶応大学文学部「三田文学」―荷風と晶子
11. 「青鞜」創刊と平塚らいてう
12. 鉄幹と晶子のヨーロッパ旅行
13. 中央公論・人物評論（二十九）「與謝野晶子論」
14. パーシバル・ローエル最初の日本滞在（明治十六年）
15. ローエル第二回来日とラフカジオ・ハーン
16. ローエル第三、第四回来日と神道研究
17. ローエル天文台火星観測と「オカルト日本」
18. ローエル「火星とその運河」はどこへ行ったのか
19. 「没個人性」と「個人性」
20. ハーバート・スペンサー「社会進化論」とその影響
21. ハーン「神国日本」と日本の将来
22. ローエル「極東の心」と「極東民族滅亡論」
23. 鷗外はなぜ「ローエル」を「ロレル」と誤ったのか
おわりに―晶子の帰国と明治の終わり
付録

ローエル「極東の心」第一章「個人性」（翻訳）

はじめに

森　鷗外の評論に「與謝野晶子さんに就いて」というのがある。[2] これは「中央公論」明治四十五年六月号に発表された。「中央公論」で半ページに充たないのだから「評論」より「感想」と呼んだほうが正しいのかも知れない。

△與謝野晶子さんに就いて

森　林太郎

僕が特に言はなくてはならない事は無いだらう。併し樋口一葉さんが亡くなってから、女流のすぐれた人を推すとなると、どうしても此人であらう。晶子さんは何事にも人眞似をしない。個人性がいつも確かに認められる。此頃アメリカ人 Percival Lorell は極東人の特性は個人性の無い處に在ると云つてゐる。晶子さんを見せて遣りたい。但パリイにはいよ〳〵見せる事になつた。

序だが、晶子さんと並べ稱することが出來るかと思ふのは、平塚明子さんだ。詩の領分の作品は無いらしいが、らいてうの名で青鞜に書いてゐる批評を見るに、男の批評家にはあの位明快な筆で哲學上の事を書く人が一人も無い。立脚地の奈何は別として、書いてゐる事は八面玲瓏である。男の批評家は哲學上の問題となると、誰も誰も猫に小判だ。

ここで鷗外が「パリイにはいよ〳〵見せる事になった」と書いているように、晶子はこの「中央公論」が本屋の店

頭に並ぶ一カ月前の五月五日に新橋を発ってパリに向っていた。夫の鉄幹が昨年十一月にヨーロッパ旅行に出て、現在パリに滞在しているのに合流しようと言うのである。

それで「中央公論」では滝田哲太郎（樗陰）[3]が企画して、この機会に「與謝野晶子論」を特集しようとした。このタイプの試みは前からあって、晶子のは「人物評論」（二十九）にあたる。

この「與謝野晶子さんに就いて」の中で鷗外は晶子の中に「個人性がいつも認められる」とした上で、「アメリカ人Percival Lorell」の説を引き合いに出す。

「極東人の特性は個人性の無い處にある」というのがこのアメリカ人の考えである。

たしかに「アメリカ人Percival Lowell」は「The Soul of the Far East」（極東の心）（一八八四、明治二十一年）を書いて、その中で日本人には「個人性」（Individuality）がないと主張していた。ただしこれは鷗外の言う「此頃」ではなくて、二十年も前のことである。

まだ日本に来るまえにラフカジオ・ハーンはこの「極東の心」を読んで、感激した手紙をフィラデルフィア市眼科医グールドに書いた。これが明治二十二年である。

「驚くべき本、神様のような（god like）本です。その一字でも逃さずに読んで下さる事を約束して下さい。」

この本に出会ったのがハーンを日本に導く動機の一つだとまで言われている。

パーシバル・ローエルが始めて日本に来たのが明治十六年（一八八三）である。彼はこのあと三回日本に来るが、いずれも一年足らずの滞在しかしていない。そして明治二十一年、ボストンに帰っている期間に「極東の心」を出版した。

最後に来日したのが明治二十五年で、このときは六インチ天体望遠鏡を持って来た。これで日本に火星観測の適地

を捜すためだったのである。結局のところ日本では適当な所がなくアメリカに帰ってからアリゾナ州に天文台を建てた。すべて私費である。このローエル天文台での火星観測の結果は、多くの著書となって発表された。この中でもっとも知られたのは「生命の住み家としての火星」（一九〇八、明治四十一年）であろう。

この中でローエルは「火星住人説」を唱えた。火星には「運河」があって、これは知能のある生物の構築物だというのである。この大胆な学説は全世界の新聞種になったから、鷗外が耳にしないはずはない。

だがこれらは「アメリカ人ローエル（Lowell）」の業績であって、鷗外の書いている「ロレル（Lorell）」の仕事ではない。鷗外は「極東の心」を書いたローエルと、火星天文学者ローエルが同一人物であることを知っていたのであろうか。知っていたらどうして「ロレル」などと間違って綴ったのであろうか。

1. 森　鷗外の天体観望「観象」

芥川龍之介の言う「学は古今を貫き、識は東西を圧している」[4]鷗外もあまり天文学には詳しくなかったらしい。このことは私が『晩年の父』森　鷗外と『観象』という小論の中で指摘しておいた。[5]ここで「観象」とは、われわれ星仲間で言う「天体観望」のことである。「観象」は鷗外晩年の日記「委蛇録」の中に出て来る。[6]

大正十年八月二十三日と一日おいて二十五日にこうある。

二十三日。火。晴。類復常。観象。

二十四日。水。晴。

二十五日。木。晴。再観象。

このころの日記はこのように素っ気ないものが多い。二十三日「類復常」は一緒に別荘に来ていた三男類の熱が下

がったことをいう。妻しげ子は杏奴と類を連れて八月十四日（日）から日在（ひあり）に来ている。その着いた十四日に「類発熱」とある。

この日記の中の「観象」が星を見ることであると私がすぐに気付いたのは、岩波文庫に再刊された小堀杏奴「晩年の父」[7]を私が読んでいたからである。

杏奴はこの「観象」の年、大正十年に十二歳であったが、十三年も経ってから書いたこの「晩年の父」には、信じられないほどの瑞みずしい感性でしっとりと、しかも適確に六十歳の父鷗外の晩年が描写されている。

鷗外は星を見に家の前の川岸へ行く。母も弟もつまらないというので杏奴だけが行くのである。

「父は提灯を川岸の石の段に置いて、地図みたいなものを拡げてしゃがむと、しきりに何か調べていた。」

そして杏奴はそばで草履の先を川の水に濡したり歌を歌ったりして遊んでいた。

この川が夷隅（いすみ）川であり、この家が「妄想」の家である。杏奴のいう「地図みたいなもの」は星図である。

前の年、大正九年十二月二十九日「委蛇録」に次ぎのようにある。

二十九日。水。終日在家。山田珠樹乞刪檜山某聯隊旗歌。珠樹贈予星図。晴。

この珠樹はまえの年の十二月に長女茉莉と結婚していた山田珠樹である。「観象」の大正十年、鷗外は六十歳であるが、彼はこの歳になって始めて星座に興味をおぼえて「観象」したらしい。

鷗外はこの「観象」の夏休みから帰ってすぐの十一月から下肢に浮腫を覚えはじめた。彼が死亡するのは次ぎの年、大正十一年七月九日である。

「與謝野晶子さんに就いて」の中で鷗外は晶子を褒めるのに、樋口一葉と平塚明子（ハルコ）（雷鳥、らいてう）を引き合いに出している。それで鷗外がどうして綴字を間違えたのかとか、ローエル「極東の心」の中の「個人性」にはあとで触

れることにして、始めに鷗外とこの明治女性三人、一葉、晶子、雷鳥との関係を眺めてみよう。

2. 鷗外　めさまし草「たけくらべ」評

鷗外はもともとフェミニストである。子供のときからしっかり者の祖母と母に囲まれて育てられた。この明治四十五年、祖母の清子は亡くなっていたが、母の峰子は元気で観潮楼の家事を取り仕切っていた。

鷗外の女性に対する理想像を「安井夫人」[8]（大正三年、一九一四）に見ることができる。美貌で健気だが、才気を内に秘めて外にあらわさない。夫や周囲に従うように見えて、どこかはるかの星を見つめている風でたじろぐ所がない。一葉は逆境にあって、しかも生涯の最後の一年に、身を絞るようにして、傑作を残し二十五歳の若さで死んだ。鷗外が晶子のことで一葉のことを思い出して不思議ではない。

彼が「たけくらべ」評を書いてから十六年も経っている。日清戦役出征で途絶えていた「柵草紙」を、新しく「めさまし草」として復刊したのが一葉の死の年、明治二十九年一月である。これには「三人冗語」という批評欄があって、幸田露伴（肥天子）斎藤緑雨（登仙坊）それに鷗外（鐘礼舎）が筆をとっていた。[9]

「たけくらべ」評は「巻の四」（四月二十五日刊）にある。一葉の「たけくらべ」は昨年の一月から、この年の一月にかけて「文学界」に連載されていたのだが、この四月に一括して「文芸倶楽部」に再録された。

「三人冗語」ではまず「頭取」が作品の梗概を紹介する。ついで「ひいき」が長ながと、しかも筋を追って細く分析し称賛の言葉を惜しまない。「多くの批評家多くの小説家に、此あたりの文字五、六字づつ技倆上達の霊符として呑ませたきものなり。」この「ひいき」は皮肉家の緑雨であろう。

最後に「第二のひいき」鷗外が締めくくっている。外国人の名前や「Milieu」など言う外国文字が顔を出している

のでそれがわかる。ゾラやイプセンの真似をした自然派が好んで写す「人の形した畜類ならで」一葉の作品には「吾人と共に笑ひ共に哭すべきまことの人間」が活写されている。

大音寺前という「彼地の『ロカアル、コロリット』を描写して何の窘迫せる筆痕をも止めざるこの作者は、まことに獲易からざる才女なるかな。」

このとき鷗外、三十五歳で赤松登志子と離婚してから六年になる。荒木しげ子と再婚するのは六年あとである。

一葉は「めさまし草」誌上の批評を五月二日夜になってから戸川明三（秋骨）から知らされた。この模様は彼女の「みづの上日記」（廿九年、樋口なつ）に詳しい。[10] 戸川がその日に大学へ行くと上田敏がやって来て「めさまし草」を見せ、教室で「たけくらべ」評を朗読しはじめた。戸川は昨年から文科大学英文学科専科に入っていたから、本科生の上田敏と一緒の教室で講義をきいたのであろう。戸川は学校のかえり出版元の本郷「盛春堂」に寄って、一冊を購い求め、友人の平田喜一郎（禿木）の下宿に行った。

「君々、これを見給へと投つけしに取りて一目みるよりはやく平田は顔をも得あげず涙にかきくれぬ。」

それで二人はこうして夜更けにもかかわらず来訪したのである。

いま文壇の神よとまで言われている鷗外の言葉として「われはたとへ世の人に一葉崇拝の嘲をうけんまでも、此人にまことの詩人といふ称をおくることを惜まざるなり」とある。文士の身として生涯に一度だけでも、こんな賛辞を受けたら死んでも惜しくはない。

「君の喜びいかばかりぞとうらやまる。二人はただ狂せるように喜びてかへられき。」

一葉は戸川や平田とほぼ同年輩である。だがこの二十五年の生涯に世の辛酸をなめつくして、人の心の信じ難さを身に泌みて知っている。だから同じ日の日記は次ぎのように続く。

「今清少よむらさきよとはやし立る。誠は心なしのいかなる底意ありてともしらず。我をただ女子とばかり見るよりのすさび。」ちょうど一年まえの五月十四日日記にはそのころの暮しぶりが書き残されている。

「一粒のたくはへもなしと母君しきりになげき、国子（中崎注：妹）さまざまにくどく。」

一葉は戸川らの訪問のころすでに身体の違和を感じていた。それが次第に悪くなり日記は七月二十二日で終っている。あとは病床の簡単な手記だけが書き込まれ、これも秋になると途絶えてしまった。緑雨が鷗外に頼んで医科大学教授青山胤通が往診してくれるように計らったがすでに絶望であった。死亡したのは十一月二十三日午前である。二十五日の葬儀のとき築地本願寺まで鷗外が騎乗して棺側に従うというのを妹の国子が断った。身内だけの葬儀だからというのがその理由であった。

3. 鷗外「沈黙の時代」

このころの鷗外は評論活動に熱心であるが創作の方はほとんどしていない。処女作「舞姫」を発表したのが六年前の明治二十三年、二十九歳のときで、これは足掛け四年間のドイツ留学から帰って二年目にあたる。続いて「うたかたの記」「文づかい」とロマン味の勝った外国小説を書いたが、このあと明治四十二年までの約二十年間は小説らしい物はなにも発表しなかった。

あとの文壇復帰第一作「半日」[11]は妻と自分、そして母親との確執を書いた物であるがこれは口語体で書かれている。これが鷗外としては始めての口語文作品である。「たけくらべ」評の次ぎの年、明治三十年「新小説」に出した「そめちがへ」[12]は創作不毛の時期に発表されたほとんど唯一の小説らしい物である。これはまだ文語体で書かれている。しかもその題材といい文体といい、全くと言ってよいほど戯作者風である。これでは当時流行の尾崎紅葉「硯友社」

の亜流と批評されても仕方のない凡作であった。

このころは鷗外に限らず文壇全体が混迷の中にいわば漂っていたと言えようか。模索の中に溺れてしまった文士が多かったなかで、賢明な鷗外は創作の方ではあえて沈黙を守った。

小説など書かなくても軍医として食って行けたからである。

この軍務の方であるが明治三十二年、三十八歳になると第十二師団軍医部長に任命され、評論や創作活動に便利な東京から小倉にまでとばされてしまった。三年間の小倉時代の始まりである。これが人事問題にからんだ左遷であったことは誰の目にも明らかであった。母峰子への手紙に次ぎのようにある。[13]

「当地にても小生の小倉に来りしは左遷なりとは軍医一同申居り決して得意な境界には無之候。」

鷗外も一時は辞職を申し出ようとしたが、友人賀古鶴所の忠告で辛抱することにした。こう言う場合の鷗外の石見人らしい「陰性の根性」には感心させられる。

この小倉時代に書いた物には、あとで触れる翻訳物を別にすると、僅かに「心頭語」「続心頭語」が数えられるに過ぎない。これは「二六新報」に連載された随筆とも箴言ともつかぬ雑多な物の寄せ集めである。しかも発表にあたって「千八」と言う変名を使った。「心頭語」は東京にいたころから福沢諭吉「時事新報」に出していた「智慧袋」の続きにあたる。「知慧袋」はクニッゲ「交際法」の抄訳である。[14] こんな世間知を書くことで左遷への憤懣を慰めていたのであろうか。[15]

鷗外が聡明であったことは万人の等しく認めるところである。だが私には彼のこう言う「田舎者」臭さが鼻につく。「沈黙の時代」と言われる小倉勤務の間にも、アンデルセン「即興詩人」の訳業の方は休みなく続けられていた。これは翻訳とはいうものの、なかば創作である。レクラム版ドイツ語訳「Improvisatoren」と読み較べてみたらすぐに

わかる。鷗外の創作欲はこの訳業によって僅かに癒されていたのであろう。しかもこれは鷗外の得意とする文語体に訳されている。文章の中の「音感」と「視感」を重視した鷗外は、この雅文に漢語を混じえた流麗な訳文の中にその才能を遺憾なく発揮した。しかも翻訳では彼の不得意とする想像力を働かすことが求められない。ほとんど漢文に近い鷗外晩年の「史伝物」はだから、この傾向の延長線上に位置する物と考えた方がわかりやすい。

はじめ「柵草紙」続いて「めさまし草」に連載された「即興詩人」は、明治三十五年東京に帰ってから春陽堂からまとめて出版された。

4. 與謝野晶子と「明星」創刊

鷗外「小倉時代」は與謝野晶子のほとんど彗星のような登場と重なり合う。鷗外が小倉に移った次ぎの年、明治三十三年鉄幹（寛）は二十八歳である。「明星」はこの四月に創刊された。そして八月には大阪の関西青年文学会で講演した。このとき始めて鳳　晶子、山川登美子と会った。晶子は二十三歳である。

晶子「みだれ髪」が新詩社から出版されたのが次ぎの年、明治三十四年八月で、晶子は五月に上京して鉄幹のところに身を寄せていた。「明星」はこれから明治四十一年十一月に通巻百号が出るまで八年間続く。

そして一つの時代を創った。

明治三十五年三月、鷗外は「少々美術品ラシキ」[16]妻しげ子を伴って観潮楼に帰って来た。足掛け四年も小倉にいたことになる。帰えると早そう「めさまし草」と上田敏主宰「芸苑」を合併することにした。これは前まえから相談していた事で、こうして出来たのが「芸文」である。ただこの名前は短命で十月には「万年草」と名を変えた。この「万年草」を舞台とする鷗外の評論活動も二年ほどしか続かない。明治三十七年三月には廃刊にした。この年の二月に日

露戦争が始まり、鷗外は第二軍軍医部長として出征したからである。

晶子の長詩「君死にたまふこと勿れ」は、この開戦の年「明星」九月号に発表された。晶子の勇気にも感心させられるが、時代がまだ若く弾力に富んでいた事がこれからもわかる。

戦争は一年半ほどで終わり、次ぎの年明治三十八年九月にはもう講和条約が米国ポーツマスで調印された。これを不満とする交番の焼き打ちが各地でおこった。この年、上田敏の訳詩集「海潮音」が出版された。晶子、山川登美子、増田雅子「恋衣」が刊行されたのもこの年である。三人は「明星」三才媛と呼ばれた。このうち大阪出身の雅子はのちにドイツ文学者茅野蕭々と結婚して茅野雅子となる。このころ雅子と登美子は日本女子大学の寮にいたが、この詩集の刊行で停学処分を受けた。目白台のこの大学は明治三十四年四月に設立されていた。

5. 夏目漱石「吾輩は猫である」

この年の一月から「ホトトギス」に連載が開始された夏目漱石「吾輩は猫である」は、これらのどれにも増して一般の話題を浚った。[17]「大学の先生がこんな物を書くのか。」

漱石は戦争の始まる前年、明治三十六年に二年間のロンドン生活に切りをつけて帰国していた。彼は鷗外より五歳年下であるからこのとき三十七歳である。帰ってすぐ熊本の第五高等学校を辞めて第一高等学校講師と文科大学英文科講師に就任した。住んだのは駒込千駄木町（太田の原）の借家である。この「猫の家」には十三年も前に鷗外が二年ほど住んでいた。

明治二十三年、登志子（赤松姓）と一年半の結婚生活ののち離婚した鷗外は、長男の於菟を千住の父母のところに預け二人の弟と一緒にここに移ったのである。

文科大学における漱石の前任者はラフカジオ・ハーンである。

ハーンは六年前から文科大学で教えていたが、一時帰国などでもめてこの明治三十六年三月に解雇されていた。次ぎの年に早稲田大学に移り九月二十六日に死亡した。

ハーンは詩人肌の男だから、その講義は文学的で学生の間に人気があった。ところが新帰朝の漱石は本格的に「英文学概説」を講じた。これが生硬で難解だと言うので学生の評判は良くなかった。彼は座談や即興的な講演がうまかったのと反対に、理論的な講義は下手だったようである。あれやこれやでイギリス時代に始まった強度の神経衰弱がぶり返えしてしまった。この危機を救ったのが「猫」の執筆である。次作の「坊ちゃん」でもそうだが、この「猫」にはいかにも「カンシャク玉」の破裂だというような個所が随所に見うけられる。

戦争がすんで文壇に活気がもどって来た。鷗外もじっとしておれない。「猫」執筆中の明治三十八年も押しつまった十二月三十一日付鈴木三重吉への手紙に、漱石は次ぎのように書く。[18]

「早稲田文学が出る。上田敏君抔が芸苑を出す。鷗外も何かするだらう。ゴチャ〳〵メチャ〳〵其間に猫が浮きつ沈みつして居る。中々面白い。」

「早稲田文学」は一時廃刊だったが、島村抱月らによって復刊されることになっていた。

このころの文壇事情は鷗外の立場から見ると次ぎのようになる。これは「半日」と同じ明治四十二年「スバル」に書いた「キタ・セクスアリス」の中にある。[19]

「そのうちに夏目金之助君が小説を書き出した。金井君は非常な興味を以て読んだ。そして技癢を感じた。さうすると夏目君の『我輩は猫である』に対して、『我輩も猫である』といふやうなものが出る。『我輩は犬である』といふやうなものが出る。金井君はそれを見て、つひつひ嫌になってなんにも書かずにしまった。そのうちに自然主義と

いふことが始まった。」

十年前に「若菜集」で新時代の瑞みずしい情感を詠いあげた詩人島崎藤村が「破戒」の小説家に変貌する。これが「坊ちゃん」と同じ明治三十九年で、次の年に田山花袋「蒲団」が世に出た。

いままで不透明な混沌の中に漂っていた文士たちも、ようやくぎこちない口語文を使いこなすのに慣れた。人びとはこの文体に従って自分たちの好むところを書くようになった。この傾向はまた「明星」派の凋落を意味する。

鉄幹らの一時代は終ったのである。

6. 新詩社「明星」最終号

鷗外は明治四十年にとうとうライバルの小池正直のあとを継いで陸軍軍医総監に任命された。賀古鶴所を通じて長州閥の山縣有朋にとり入ったのが効を奏したのであろう。そしてこの年三月から毎月一回観潮楼で歌会を持つことにした。招いたのは新詩社の與謝野鉄幹、子規の流れをくむ根岸派「ホトトギス」の伊藤左千夫、それに竹柏会佐々木信綱などである。この歌会の目的はこれら諸派の連合と革新をはかるのだと称された。この集まりは三年ほど続き、あとで晶子や石川啄木も参加することになった。

鷗外が軍医総監になった明治四十年、漱石の方は大学を辞めて朝日新聞に入社し、六月から「虞美人草」を掲載し始めた。漱石にしたら「プロ」としての第一作であり気負いもあったのであろうが、文章の凝った割りには良い作品とは言えない。それでも世評は高く「虞美人草ゆかた」などが流行した。[20]

そんな評判は別にしても、漱石がこの作品の中で「藤尾」という美貌で驕慢、そして自我の強い女性を主人公にした事は注目されてよい。一葉「たけくらべ」のころには考えもできなかった「新しい女」の登場である。こんな「新

しい女」が現に存在すること実証して見せたのが平塚明子であったと言えなくもない。

「明星」の終焉はこの「新しい女」の出現と時を同じくする。これも時代である。

明治四十年七月、鉄幹は木下杢太郎、北原白秋、吉井　勇、平野万里らと九州に遊んだ。そしてこの杢太郎、白秋、勇が新詩社を退社したのがこの年の暮である。

この事件で鉄幹も晶子も自分たちが築いた「明星」の華やかな一時代が終ったのを悟ったに違いない。次ぎの年、明治四十一年十一月に「明星」が通巻百号に達したのを期にこれを最終号とすることにした。

鷗外はこの号に「ホルツ、シュラアフ合作、森　林太郎口訳」短篇「わかれ」[21]を寄稿して記念とした。明治三十三年が創刊の年であるから「明星」はそれでも八年も続いたことになる。

7.「スバル」創刊と石川啄木

このころ新詩社の世話役は平野万里である。[22] 万里は本名を平野久保といい、父親の甚三は埼玉から出てきて本郷森川町で文房具店兼煙草屋をしていた。ここは移転するまえの第一高等学校の横である。

平野の家は鷗外のところと縁が深い。[23] 登志子と離婚して家をとび出した鷗外は、駒込千駄木町（太田の原）の借家に移ったが、生まれたばかりの於菟に乳がないので、千住にいた父母に預けるより外に手がなかった。しかしここで雇った乳母の乳の出が悪い。そこで改めて平野に預けて甚三の妻の乳をもらうことにした。だから於菟と万里は乳兄弟ということになる。万里は於菟より五歳の年上でこのとき六歳であった。

於菟は小学校に上がるころまで、ここで育てられた。

文学少年に成長した万里は「明星」に短歌を投稿しはじめ、第一高等学校では茅野儀太郎（蕭々）と仲間になった。

万里という号はこのころ鉄幹に付けてもらったのである。高等学校卒業後は工科に進み、「明星」終刊の明治四十一年七月には工科大学応用化学科を卒業して工学士になっていた。

こんな縁から万里は新詩社の鉄幹、晶子と鷗外との間の連絡係りに打ってつけの人物である。鷗外日記に頻りと顔を出している。

明治四十一年[24]

七月十一日（木）　佐々木信綱、石川啄木、中村蓊来訪す。

九月二日（水）　夕に與謝野寛、平野萬理、石川啄木至る。

十月七日（水）　夜與謝野寛、平野久保、佐々木信綱来話す。與謝野は明星終刊號の事を議るなり。平野は昂初號の事を議るなり。

十一月二十七日（金）　夜平野久保来てプルムウラの稿本を持ち去る。

十二月五日（土）　夜與謝野夫妻、平野久保来訪す。晶子の来たる是日を始とす。

これを見ると十月にはもう「スバル」（昂）という雑誌の名前まで出来ていたことになる。

「スバル」第一号の扉に発刊の辞があって、「我々は決して一定の主義若しくは簡単なる動機の下に相集った訳ではない」とある。そして「スバル」という名前についての説明が続く。これは「昂宿」のことであるが、雑誌にこの名前を付けたのに意味はない。「一つの符牒」と受け取ってほしい。

この文章は誰が書いたのかわからないが、「スバル」という雑誌の名前は鷗外が付けたことになっている。明星から出た星ぼしがもう一度ここに集って「昂宿」を作ったとの意味が込められているのであろう。

「スバル」第一号は明治四十二年一月一日発行である。表紙絵は和田英作の手になるもので、いままでの「明星」の

表紙が挑戦的といえるまでに骨太だったのに較べて、淡い灰緑色にすっきりとまとまっている。ギリシャ古陶から採った物であろう横長のデザインには、ギリシャ文字で「PLEIADES」と書いてある。そしてその下に「プレイアド」七人娘が風に衣をなびかせて立っている。雑誌の名前「スバル」があるのはその下で、片仮名で右から左に書いてある。裏に返えすとそこには鷗外の漫画似顔絵が四種類こちらを向いている。

平野万里が「持ち去った」鷗外書きおろしの戯曲「プルムウラ」[106]は目次では付録となっているが、これが巻頭においてある。西印度信度国王女プルムウラの復讐譚に題材をとった一幕二場物である。続いて木下杢太郎（太田正雄）「荒布橋」、石川啄木「赤痢」、與謝野寛「大畑駅」などの小説が掲載されている。寄稿者の中に阿部次郎の名前があるのが珍しい。

詩歌の部には白秋、晶子、吉井勇、上田敏、平野万里、茅野雅子など当代一流の名前が、十一名も並んでいて壮観である。広告欄に北原白秋「邪宗門」が宣伝されている。

奥付には定価三十錢とあって、編集発行人の名前が書いてある。

東京市本郷區森川町一番地新坂三五九
蓋平館別荘
編輯発行人　　石川　一

この「石川　一（ハジメ）」は啄木の本名である。啄木はこの明治四十一年の四月に家族を函館に残して三度目の上京をしていた。小説を書いて鷗外にその出版を頼んだが、引き受けてくれるところはどこもなかった。友人の金田一京助が金銭的援助をしてくれ、鉄幹の世話で「スバル」の編集を手伝わせてもらったのである。

鷗外の家ではこの年の八月十八日に「Piano」を買っている。また十月二十七日夜には泥棒が入ってしげ子のダイヤ

モンドの入った金指輪、金時計、鷗外の銀時計、それに現金七十五円が盗まれた。もっとも金指輪の方はあとで泥棒が小包郵便にして送り返してきた。

啄木はこの「スバル」発刊から一カ月あと、明治四十二年二月から朝日新聞の校正係に就職できたが、六月に家族が上京して来るとまた生活が苦しくなってきた。「スバル」の方は翌年の明治四十三年一月号から江南文三が編集することになった。江南も新詩社同人の歌人である。啄木と違ってその明るい性格が鷗外や鉄幹夫妻に愛された。

口の悪い啄木はその日記に江南について書いている。[25]

「逢わずにいると馬鹿気た男だが、逢ってみると可愛い所のある男である。一家の見を持ってゐると思っている処が殊に。」

この年の六月「大逆事件」は啄木にとって衝撃であった。これは誰にとっても同じであろう。啄木は激越な評論「時代閉塞の現状」を書いたがもちろん印刷にはしなかった。

彼の処女歌集「一握の砂」が出版されたのが、この年の十二月一日のことである。

年が明けて明治四十四年になると早そう、友人平田修（ヒライチ）を神田北神保町の法律事務所に訪ねた。平田は弁護士であるが新詩社同人でもあり、鷗外の観潮楼歌会に参加させてもらっていた。こんな関係から「スバル」創刊には早くから手を借し、その発行所を自分の法律事務所の名儀にしていた。「スバル」第一号奥付に「編輯兼発行人　石川　一」と並んで彼の法律事務所の住所が書いてあるのはこのためである。

東京市神田区北神保町二番地　発行所　昂発行所

啄木がこの時に平田を訪問したのは大逆事件裁判の模様を聞くためである。鉄幹らは平田に頼んで幸徳秋水の弁護

を引き受けてもらっていた。平田の方はかねて知り会いの鷗外から、そのころ余り多くなかった社会主義の本を教えてもらって弁護に備えた。しかし鷗外日記には大逆事件について全く記するところがない。

啄木と同じように衝撃を受けた一人に徳富蘆花がある。彼は第一高等学校弁論部委員からの依頼で大逆事件について講演することを約束した。このとき頼みに来た委員の一人が河上丈太郎である。幸徳らの判決は一月十八日に下った。ここで二十四名の死刑が言い渡された。次ぎの日に十二名が無期に減刑され、残った十二名の死刑は一月二十四日と二十五日の二日に分けて執行された。二十五日朝の処刑は管野すが子ひとりである。[26]

蘆花は明治天皇への上奏文「天皇陛下に願ひ奉る」を書いて、朝日新聞主幹池辺三山に送って掲載を依頼していたがすでに遅かった。二月一日第一高等学校での蘆花の講演「謀叛論」で蘆花は言う。[27]

ほんの五十年まえの明治維新を考えてみよ。

吉田松陰など勤王の志士は「時の権力から云えばみな謀叛人であった。」「新しいものは常に謀叛である。」

時代にはまだ若い力が失われていない。

裁判のあと四月から啄木の肺結核の病状が進んだ。生活の苦しさがこれに輪をかけた。それでも彼は第二歌集の準備に身を削る。貧困とそのため派生するさまざまな家庭内のトラブルに悩まされたこの年も暮れて、明治は最後の年四十五年を迎えた。その三月七日に母が死亡し、啄木も四月十三日朝に死んだ。若山牧水が駆けつけてくれた。

啄木は二十七歳である。

六月に第二歌集「悲しき玩具」が出版された。この名前は土岐哀果が付けた。

妻の節子は二人の娘を連れて函館の実家に帰ったが、これも翌年五月に死亡した。彼女は啄木と同じ歳であるからこのとき二十八歳である。

8. 平塚明子と「煤煙」事件

「明星」終焉の明治四十一年秋には朝日新聞に連載中の「三四郎」が評判になっていた。同じ連載でも「虞美人草」に続く「坑夫」は地味な作品で世評はそれほどでなかった。それに引きかえ「三四郎」の方は新しいタイプの教養小説の先駆けとして歓迎された。おそらく漱石にしてもこの作品で始めて「この線で行こう」と言う手答えを実感したことであろう。

「三四郎」の中で漱石は「美禰子（ミネコ）」という「新しい女」を創造した。詳しく調べたわけではないが、私にはこの「美禰子」の中に平塚明子（ハルコ）の一部が投影されているのではないかという気がする。明子はこの三月、漱石の弟子の森田草平と心中未遂事件をおこしたばかりである。

日本女子大学出身で二十二歳の才媛と帝大卒業の二十八歳の教師との心中未遂である。それも教師というのが流行作家夏目漱石の弟子と言うではないか。新聞社が色めき立ったのも無理はない。

二人は三月二十一日塩原で保護された。それを報じる東京朝日新聞三月二十五日号は大きく「自然主義の高潮」と見出しをつけた。ちょうど、このころ色情狂「出歯亀」事件があったばかりで、自然主義が出歯亀主義と呼ばれるようになっていたから、こういう使われ方がされたのである。

貧困の中に青春時代を送った一葉と違って、明子の方は二十二歳までなに不自由なく過ごした。父親定二郎は会計検査院の高級官僚でドイツ外遊までしていた家庭である。[28][29]

一葉が死んだ明治二十九年、明子は本郷区西片町の誠之小学校で尋常四年生になった。家が駒込曙町に引越したので富士見小学校から転校したのである。二年下の学級には森　於菟がいたはずだが、「たけくらべ」の私立育英舎と違って山の手の学校であるし、学級もちがうから話し合うこともなかったであろう。

このころの小学校は尋常科が四年、高等科も同じく四年で、高等科二年から女学校へ行けた。明子が誠之小学校高等科二年から東京女子高等師範学校の付属高等女学校に入学したのが明治三十一年四月である。いわゆる「お茶の水」で一年前から姉の孝（タカ）が通っていた。曙町の家からもちろん歩いて行けた。ここを卒業したのが明治三十六年三月で、四月から日本女子大学家政科に入学した。父親が反対したのに母の光沢（ツヤ）が取りなしてくれて英文科の代わりに家政科ということで許してもらった。明子は十七歳である。

大学のある目白まではさすがに遠かったが、それでも始めの内は歩いて通った。

彼女が女子大に入学して早そうの五月二十二日に、世間を衝動させた事件がおこった。藤村操の日光華厳の滝投身自殺である。藤村操は十八歳で第一高等学校の生徒であった。

明治も三十五年ごろから哲学、宗教熱が高揚していた。井上哲次郎、姉崎嘲風、高山樗牛の時代である。

「万有の真相は唯一言にして悉す、曰く不可解」という辞世の文章は明子を感動させたに相違ない。

しかも相手は自分とほとんど同じ歳ではないか。明子も哲学、宗教関係の本を読み漁るようになり、卒業前の明治三十八年からは参禅するまでになった。この年は終戦の年で漱石「吾輩は猫である」が評判になっていた。

女子大卒業は明子二十歳の明治三十九年三月である。卒業してから英語の実力を身につけようと言うので麹町の女子英学塾に通った。それでも参禅の方は休まずに続けていて、この七月に見性悟入を許された。法名（安名（アンミョウ））を慧薫といった。次ぎの年、女子英学塾を辞めて成美女子英語学校に入学した。ここは飯田町仲坂下だから家からそう遠くない。このころ学校では大学を出たばかりの文学青年生田長江や相馬御風が教えていた。

明子が入った六月から長江が音頭をとって「閨秀文学会」が作られることになった。毎週土曜日午前中一時間の文学講座である。講師は長江がよんで来て、與謝野鉄幹、晶子夫妻、平田禿木、戸川秋骨、上田敏、島崎藤村それに森

田草平などであった。

明子は「自伝」の中で「閨秀文学会」での晶子の講義ぶりについて語っている。晶子は「みだれ髪」の自由奔放な作者のイメージとは全く違っていた。源氏物語の講義は「まるでひとりごとのようなもので、しかもそれを関西弁で」話すので、その内容はだれにもほとんどわからなかった。

生徒の中には青山菊栄もいた。あとの山川菊栄である。

始め十数名であった生徒も夏休み明けに再開したときには数名に減り、講師も生田長江、馬場孤蝶、森田草平の三人だけになってしまった。孤蝶の兄は自由民権運動で活躍した馬場辰猪である。この兄が明治二十一年アメリカで客死してから、一家の面倒は孤蝶が見なければならなくなり彼は苦労していた。明治学院にいたとき孤蝶の同級には島崎藤村と戸川秋骨がいた。

この秋に明子も長江の勧めで「愛の末日」と言う小説を書いた。これを森田草平が批評してくれて二人の交際が始まった。そして次ぎの年、明治四十一年三月の心中未遂事件である。

連れもどされた草平はすぐに漱石のところにもぐり込んだ。夏目家は前の年の九月に本郷から早稲田南町に引越していたから草平が世話になったのはこの家である。それにしても、こんなに世間を騒がした醜聞の主人公を一カ月も匿ってやった漱石の侠気に感心させられる。

それより文句も言わず草平の世話を焼いた鏡子夫人を称えるべきかも知れない。[30]

漱石はこのころ朝日新聞に「坑夫」を連載していた。これが済んで八月から「三四郎」を書き出し、これは九月から十二月末まで連載された。女主人公「美禰子」に草平から聞いた明子の性格、行動が反映していると思えるのはすでに指摘した。この「三四郎」のあとを継いで草平の「煤煙」が次ぎの年、明治四十二年一月から六月にかけて連載

されることになった。もちろん漱石の世話であるが、噂の渦中の人の暴露小説であるから、その出来栄えは別にして評判になった。この一月は編輯発行人石川　一の名前で「スバル」が世に出たのと同じ年である。

9. 鷗外の文壇復帰第一年目

明治四十二年新しい発表機関「スバル」を得て、四十八歳の鷗外はこの雑誌に洪水のように作品を発表し始める。二十年におよぶ「沈黙の時代」は終わりを告げた。

これには「スバル」創刊という刺激以外に、やっと陸軍軍医総監に昇りつめたという安心感がある。

漱石が自然主義とは別の道を平然と歩んで、世評の高い作品を次ぎつぎと朝日新聞に発表していた事に対する競争心も否めないであろう。

三月「半日」五月「追儺」「懇親会」六月「魔酔」「大発見」七月「キタ・セクスアリス」八月「鶏」九月「金貨」十月「金昆羅」。この中で「追儺」「懇親会」「大発見」を除く全てが「スバル」での発表である。

ただ「キタ・セクスアリス」を載せた「スバル」七月号は発売禁止となり、鷗外は石本新六陸軍次官から戒飭を受けた。

これらの作品は「キタ・セクスアリス」を別にすると、ほとんど彼の身辺雑事に題材をとった物である。当時としては陸軍軍医総監がこんな物を書くと言うので珍らしがられたのかも知れないが、私にはそう優れた文芸作品とは思えない。中でも「懇親会」にいたっては朝日新聞記者との喧嘩を書いた物である。

「前の小池は太っ腹だったが貴様は腹黒い」と殴られたのだそうである。

文芸作品としての質は別としても、大人気ないと批評されても仕方がない。

こんな評判は当時もあったのであろう。

鷗外は十二月「新潮」に「予が立場」[30]という言訳けめいた物を書いている。

今をときめく人は自然主義の花袋、藤村、白鳥、そしてそれに少し距離をおいた漱石とそのまわりの二、三の人であろう。だが私はこれらには無関心に、あせらず、あきらめもせず、現実を甘受して自分の道を行くだけである。

「私の心持ちを何といふ詞で言いあらはしたら好いかと云ふと Resignation だと云って宜しいやうです。」

この「Resignation」の中には家庭における妻と母親との間のやり切れない争いに対する気持ちも多分に混じっている。しげ子は五月に杏奴を生んでから小説を書くようになった。鷗外が勧めたからで、これで気が紛れるだろうと言うのである。その結果が十一月「写真」十二月「波瀾」で、ともに「スバル」に発表された。

これらに新しく書きおろした物を加えて作品集「あだ花」が次の年、明治四十三年六月に出版された。[31]「スバル」七月号に出た広告には発行元が弘文館、定価九十銭とある。どの作品にも鷗外が手を入れたから、題材は別として文章だけを見ると誰の目にも鷗外の作品と映る。

鷗外文壇復帰第一年の明治四十二年、漱石の方は六月から十月まで「それから」を朝日新聞に連載した。それがすむと、かねてからの過労もあって胃の状態が思わしくないのに十月まで朝鮮、満洲旅行をした。大学で友人だった中村是公が満鉄総裁になっていて招いてくれたのである。

下関に帰って来たのが十月十四日で、そのすぐあと十月二十四日に伊藤博文がハルピンで暗殺された。

満鉄と言えば平野万里は次ぎの年に満鉄中央研究所に就職し六月に大連に赴任した。

鷗外日記「六月十二日（日）。晴。平野久保が満洲にゆくを送りに新橋へ行く。[32]」もちろん乳兄弟の於菟も駅まで一緒に行っている。「帰路於菟と資生堂へ曹達水を飲みに立ち寄る。」

於菟の生母登志子はすでに世にない。鷗外は若いときの不幸な結婚から生まれたこの長男に対して、父親としての情感をもっとも濃く抱いていたのではなかろうか。

10. 慶応大学文学部「三田文学」――荷風と晶子

鷗外の創作意欲は次ぎの年になっても衰えない。明治四十三年一月「独身」「里芋の芽と不動の目」二月「青年」四月「桟橋」五月「普請中」六月「花子」七月「あそび」十月「沈黙の塔」十一月「食堂」などである。

「青年」を除いて全て短編である。「青年」はこの年で済まず、次ぎの年まで書き続けられた。この「青年」は鷗外には珍らしく中編であるが、私にはなんとなく嫌な作品で通読したことがないから批評の仕様がない。

この年になって目立つのは発表誌の変化である。ここに挙げた作品の中で始めの三編だけ「スバル」に出たが、それ以後のはすべて「三田文学」に発表されている。

これは鷗外が慶応大学文学部に関係を持ったからで、この年の二月にここの文学部顧問になっている。慶応大学では前から文学部刷新の希望がありこれを実行に移すことにしたのである。

相談は前の年からあったようで、鷗外は外国文学教授に漱石と上田敏を推した。二人ともこれを辞退したので結局は第二候補の永井荷風に落ち着いた。このとき三十二歳の荷風は二年前に五年間の外国生活を切り上げて帰国していた。彼はすでに在外中に外国物「あめりか物語」で認められていたが、帰ってからも「すみだ川」「冷笑」など特異な作風で注目されていた。荷風は観潮楼を訪問している。

あとの事になるが慶応大学西洋美術史の沢木四方吉が、国文学教授の人選を鷗外に相談したことがある。鷗外は言下に與謝野晶子を推薦した。沢木はまさかと言うので、寛の間違いではないかと聞き返えした。鷗外はそうではない

晶子の方だと言う。

「いや晶子さんの方。主人からは、僕は新らしい何物も聞く興味を持っておらぬ。」

沢木は晶子に頼んでみたが、晶子がぜひ寛をと言うので、この時の交渉は立消えになったと言う。小島政二郎の鷗外回想記の中にある話である。[33]

荷風が教授に就任したのが二月で、「三田文学」は荷風が主筆となって五月に籾山書店から出ることになった。

時代はしかし嵐を孕んでいる。

幸徳秋水らが「大逆事件」で逮捕されたのが六月である。だから鷗外の「沈黙の塔」は「自然主義と社会主義の本を読む」[34]人間が殺されて投げ込まれる所である。しかし鷗外は蘆花のようには行動をしない。

「辻を離れてどの人かの跡に附いて行かうとは思はなかった。」[35]

漱石の方は三月から六月にかけて「門」を新聞に連載した。相変らず胃が悪くて内幸町の長與胃腸病院に入院し、八月から修善寺温泉へ転地療養に出かけた。ここで大吐血をする。いわゆる「修善寺の大患」である。この経験を「思ひ出す事など」として朝日新聞に連載した。ペン一本の生活だから漱石も楽ではない。

11.「青鞜」創刊と平塚らいてう

明治四十四年明けてすぐに大逆事件の判決が下った。鷗外日記だけを眺めていると、こんな大事件があったことなど全くわからない。茉莉の熱が下ったとか、誰の訪問があったとか、備忘録的な内容が大部分を占めている。これは誰の日記でも同じであろう。

一月十七日（火）晴。風なし。夏目金之助に門の謝辞を申し遣る。[36]

この年も創作が多い。一月「蛇」二月「妄想」四月「心中」八月「雁」九月「百物語」十月「灰燼」。

この中で「雁」は完成までに二年かかり、「灰燼」の方は未完に終ってしまった。

「灰燼」の主人公節蔵はなんとも曖昧な人物で、鷗外が「門」とか「それから」のような作品の書けるタイプの作家でないことがこれからもわかる。

発表誌について言えばこの年から中央公論への投稿が増えている。「蛇」「心中」「百物語」がそれである。まえから観潮楼に足繁くかよっていた滝田哲太郎（樗陰）の運動が効を奏したのである。

妻しげ子は二月に類を生んだ。男子の出産はこれで二度目だが、四年前に生れた不律は百日咳にかかって六カ月で死んでいた。

しげ子のこの年の作品に「死の家」がある。これは「青鞜」創刊号に発表された。平塚明子らがこの年の九月から発行した「唯一の女流文学雑誌」である。「煤煙事件」から三年半経っている。

明子らがこんな女流雑誌の企画を考えたのは生田長江の勧めによるとなっているが、これには田村俊子の華ばなしい登場も遠い原因になっているのだろう。[37] 俊子は明治十七年生まれだから明子より二歳年上である。この浅草蔵前の下町に育った女性が大阪朝日新聞懸賞小説に当選して、その小説「あきらめ」が一月一日から紙面に載り始めた。華麗な登場である。

一葉のころと違って文芸世界でもこういう商業的ジャーナリズムが主導権をにぎるようになっていた。

「青鞜」の企画はこの年の春からである。発起人には明子のほかに保持研子、中野和子、木内錠子、物集和子（モズメ）がいた。物集以外はすべて女子大出身である。資金は明子の母が出してくれることになった。森しげ子にもそれが見られるが、このころの山の手上流家庭の婦女の、まるで熱に浮かされたような自由奔放な行動力には目を瞠る思いがする。

時代なのであろう。

編集室は始め駒込林町の物集の家においた。物集の父親は物集高見で、文部省にいたとき物集の下は「言海」[38]の大槻文彦がいた。この「青鞜」のころ物集は例の浩瀚な「広文庫」の編集をしていた。

賛助員は與謝野晶子、長谷川時雨、国木田治子、小金井喜美子、森しげ子に頼んだ。国木田は独歩未亡人で、小金井は鷗外の妹、医科大学教授小金井良精夫人である。ついでだがこの喜美子は星新一の祖母にあたる。[108]

青鞜社員には田村俊子をはじめとして、茅野雅子、野上彌生子などが名を連ねた。

妹や妻が賛助員になるというのであるから鷗外も相談を受けたに違いない。しかし鷗外日記には喜美子の娘の縁談話はあっても「青鞜」という文字はどこにも見当らない。

九月一日に発行された「青鞜」第一巻、第一号は定価二十五銭であり、百三十四ページでそれほど厚くない。表紙にはギリシャ風に編んだ長い髪を前にたらした横向きの女性像が描いてある。女は顔をあげて遠くを見つめている。

これは長沼智恵子が描いた。高村光太郎「智恵子抄」の智恵子で女子大で明子の後輩にあたる。

小説には森しげ女「死の家」田村とし子「生血」などがあり、晶子の長詩「そゞろごと」が巻頭を飾った。

それはこう始まる。

「山の動く日来る。

かく云へども人われを信ぜじ。」

明子の「元始女性は太陽であった」（感想）は中ごろ三十七ページに掲載されていて、明子の名前は「らいてう」となっている。

元始、女性は太陽であった。――青鞜創刊に際して――

らいてう

「元始、女性は太陽であった。真正の人であった。
今、女性は月である。他に依って生き、他の光によって輝く、病人のような青白い顔の月である。」

鷗外は「與謝野晶子さんに就いて」の中で「青鞜」に出ている明子の評論について「男の批評家にはあの位明快な筆で哲学上の事を書く人が一人も無い。立脚地の奈何は別として、書いてゐる事は八面玲瓏である」という。これを書いたのが次ぎの年の明治四十五年五月であるから、「青鞜」はまだ五号ほどしか出ていない時期である。

鷗外のいう雷鳥の「哲学上の事を書いた」評論を読んだことのない私には判断の仕様がない。ただ雷鳥の論理が「沈黙の塔」の中で鷗外が展開してみせた晦渋な議論より明快であったことは想像できる。

雷鳥らの運動についてであるが、私は彼女らの目標の真摯であった事を疑う者ではない。しかし彼女らの行動には驕慢な傲りが見える。私の偏見であろうか。

雷鳥は自分の美貌を知っている「おごりの春のうつくしきかな。」

「新しいものは常に謀叛である。」そして謀叛はどこかに傲りと昂りを秘めている。雷鳥らの運動もこの「傲り」のゆえに滅びる運命にある。「青鞜」の廃刊は大正五年である。

それでも五年も続いた。この五年の間に彼女の上にもいろんな出来事があった。

「吉原登楼」「五色の酒」で世間から白い眼で見られた。編集に伊藤野枝が参加してから二年になる。それに奥村博史との間には子供も生まれた。彼女は三十歳である。

だが雷鳥はこのあと「七〇年安保」まで五十五年を生きなければならない。

「自伝」の中で彼女はついに鷗外にもしげ子にも会うことがなかったと言っている。しかし鷗外は雷鳥らの運動には

理解を示してくれた。大正九年三月新婦人協会設立のとき、賛助員になってくれないかと、雷鳥の代わりに市川房枝が観潮楼を訪ねた。[39] 鷗外は趣意書から規約にいたるまで眼をとおした上で、自分で朱墨をすり細かく朱を入れてくれたと雷鳥の「自伝」にある。

12. 鉄幹と晶子のヨーロッパ旅行

「青鞜」創刊の明治四十四年十一月に鉄幹がヨーロッパ旅行に出発した。横浜から乗船して十二月末にパリに着いた。鷗外に指摘されるまでもなく、自分が晶子に詩才のみならず学才も劣ることは鉄幹も自覚している。白秋や杢太郎まで新詩社を去ってしまった。それに鉄幹も三十九歳になり少し疲れて来た。ここらで一息入れて新しい活路を探そうというのが外遊の動機であろう。準備は前の年から始めている。

こういう事になると晶子は、なり振りかまわず、ひた向きに走る。もとが堺の商家の娘だから、金の算段には馴れているし平気である。算盤も上手に弾く。雷鳥らが「青鞜」の賛助員になってくれるように頼みに行ったころ、晶子は頒布会に出品する歌屏風や半折幅物の製作に大童であった。百首屏風には百円、絹表装の半折物には五十円という価をつけた。

鉄幹も晶子も上方出身の似た者夫婦だから金に細かく、こんな事をしても平気なのだと陰口を叩かれた。田村俊子も鷗外と一緒のときに書いた「與謝野晶子論」の中で同じことをそれとなく漏らしている。もちろんこんな頒布会の上がりだけでは足らないから、大阪の小林政治（天眼）などからも援助を受けた。

その晶子が今度七人の子供を残して、一人でパリに行こうと言うのであるから大変である。晶子は鷗外にも相談を持ちかけた。それで鷗外「與謝野晶子さんに就いて」の中でいうように、晶子を「パリイにいよいよ見せる事に」な

るのである。鷗外はかねてから知り合いの三越百貨店社長日比翁助に紹介して千円を寄付してもらえるようにした。

三越百貨店発行宣伝誌「時好」に「腰弁当氏」という変名で「三越」[40]という詩を書いてやったりする間柄である。これは余興とはいえよくこんな物を書くなという程度の作品である。それでも「平民新聞」は「著想の良さ、同情に富める、筆のはこびの尋常でない、誰が見ても第一流の詩人」の作と持ち上げた。[41]

晶子と鷗外の交渉について鷗外日記明治四十五年初頭から引用してみる。[42]

一月十七日（水）、晴。與謝野晶子訳源氏物語の序を書きて文渕堂に遣る。

この序文で鷗外は源氏物語のような古典に「口語訳」があってよいと説く。著者が女性であることを意識したのか珍しく「ございます」調である。[107]

二月十一日（日）、晴。賢所に参拝し、宴を賜ふ。平野久保来訪して、與謝野晶子が洋行の事を言ふ。

二月十六日（金）、陰。悪路。安井洋、平野久保、與謝野晶子来話す。

二月十九日（月）、晴。山根中将武亮、滝田哲太郎来訪す。山根は弘前より小倉へゆく途次なり。

二月二十一日（水）、陰。與謝野晶子を日比翁助に紹介す。

二月二十五日（日）、晴。夜平野久保来話す。

三月一日（金）、雨。寒からず。日比翁助予の紹介により與野晶子（ママ）に洋行費として金千円を贈与することとなり、松居真玄その使に来訪す。その由晶子に内報す。

三月四日（月）、雨。日比翁助、佐佐布充重、小金井きみ子、賀古鶴所、Somerville 中佐に書を遣る。

鷗外の世話で千円をもらえることになった晶子は礼を言いに観潮楼を訪ねる。

三月十日（日）、半陰。風稍寒し。與謝野晶子来訪す。

石川啄木が死んだのは四月十三日であるが、日記には何も書かれていない。

五月二日（木）、雨。與謝野晶子のために訳本源氏物語の校正に着手す。

五月四日（土）、雨。與謝野晶子来り別る。

五月五日（日）晴。妻、茉莉と高輪岩崎邸のPhilpharmonie会にゆく。

妻と茉莉とは與謝野晶子を送りに新橋にゆく。

「スバル」編集者、江南文三の妻あきこは、夫と一緒に汽車に乗って晶子を平沼まで送った。晶子はウラジボストックからシベリア鉄道で陸路、五月花のパリに着く。

三千里わが恋人のかたはらに

柳の絮の散る日に来る。

五月二十一日（火）、陰。滝田哲太郎の使来て晶子論の中に予の意見を書き加へんことを請ふ。

13. 中央公論・人物評論（二十九）「與謝野晶子論」

「みだれ髪」情熱の歌人與謝野晶子が異郷にある夫を慕ってはるばるパリまで旅行すると言うのであるから話題性は大きい。「中央公論」の名編集長と謳われた滝田が見逃がすはずがない。これがこの六月号「與謝野晶子論」特集となった。もっともこんな企画はまえからあって、これが「人物評論」の第二十九回目ということになる。

寄稿者は次ぎのとおりである。

長田秀雄「與謝野晶子夫人」江南あきこ「晶子夫人の趣味と嗜好」森林太郎「與謝野晶子さんに就いて」田村とし子「晶子夫人」馬場孤蝶「芸術的気分の充実した人」茅野雅子「晶子さんの人物」佐々木信綱「晶子と一葉は明治の

清紫」小剣「紫友染の振袖」。

全体で十七ページだから江南あきこ、馬場孤蝶の物以外はそう長くない。平均一ページ程度である。

長田秀雄は今では「祇園小唄」の幹彦の兄といった方がとおりがよいだろう。江南あきこは江南文三の妻である。馬場はこのとき慶応大学教授だったし、小剣の上司小剣は読売新聞の文芸部長をしていた。

長田と江南の評論は取り立てて紹介するほどの内容ではない。四ページにわたる文章の中で江南は夫に連れられて晶子に始めて会ったときの話から、二人で晶子と一緒の汽車に乗って平沼まで送っていった次第を語る。無難でその分だけ平凡な点では茅野雅子、佐々木信綱、上司小剣らの晶子評は共通している。

面白いのはやはり不遠慮な田村とし子の「晶子夫人」であろう。とし子はまだ晶子に会っていない。

「一度もお目にかかった事がないから、どんな御様子の方だかちっとも知らない。」

ただ人の噂はいろいろと聞く。金に細かい。歌は一首で三十何銭、そのうえ掛け引きまでする。あの歳で緋の襦袢の袖をちらつかせるそうだ。上方生まれだから「絹糸を操るようなアクセントで」物を言う。煙草をくゆらす。

もちろんこれら全てを嫌だと言っているわけではない。そしてここまで言っておいて、後半ではお世辞にまわる。彼女の歌は大好きだ。七人の子供と家庭を大事にしている。

夫の寛に対しては「いつも処女の頃のような純な心」で接している。

「新しがった若い女たちが、赤い酒をのみ、青い酒をのみ煙草をくゆらせて人真似の芸術を論じている」中にあって晶子だけは独自である。「私ども同性はあくまで尊敬の意を払はなければならない」と言うのがとし子の結論である。

「赤い酒をのみ」「人真似の芸術を論じている」が雷鳥たち山の手の青鞜社同人に対する皮肉であるのは言うまでもない。とし子にとって晶子の上方風の趣味、行動はなんとなく異質にうつる。

この点について馬場孤蝶はもっと直接的に物を言う。彼の見るところによると関西人は「ユウモアに乏しいやうな気がしてならぬ。余裕が無いやうな気」がする。

それでガムシャラに突進するものだから、いわゆる成功者に関西人が多いようだ。

晶子は自分たちだったら気が咎めるような感情も平気で歌にする。歌だけでなく議論もするし行動にもあらわす。寛の洋行費を補うというので屏風掛軸に揮毫をする注文を募った。こう言うことは平気らしい。今度の旅行では総模様の派出な着物を作ったそうだ。ふつうなら厭味な物だが與謝野夫人だとそれがワザとやるという感じがしない。

夫人は理智の発達した人であると同時に物事に熱中できる人である。

「これは夫人が関西人たると共に、詩人である為であろう。」

以上のような議論に較べると鷗外の「與謝野晶子さんに就いて」は突きはなしたような物の言い方であるが簡潔で要を得ている。そして晶子には「個人性」が見られるとだけ言って、のこりの半分では平塚明子を褒めるのに回っている。「安井夫人」にある面で共通したところのある明子は鷗外の好きなタイプだったのだろう。そのうえ明子の文章はまわりくどい所がなく、しっかりしていると同時に小粋ですっきりしている。鷗外が晶子の詩人としての才能はもちろん、古典学者としての実力を十分に認めていたのは確かである。

しかし「好み」から言うと明子に傾いていたのも同じように確かであろう。

人物評論「與謝野晶子論」の最後に短いコメントがついている。滝田は鷗外に頼むと同時に幸田露伴にも何か書いてくれるように頼んだらしい。露伴は鷗外と同じように「別に話すような事はない」と断ったうえで、晶子の歌と佐々木信綱の歌を比較して次ぎのように言ったとある。

信綱の歌には好きなのが無論ある。その外に好きでも嫌いでもないのもある。

ところが晶子の歌には大変に好きなのがある半面、大変に嫌いなのがある。
好きか嫌いかのどちらかになってしまう。
いかにも露伴らしい「好み」である。

14. パーシバル・ローエル最初の日本滞在（明治十六年）

パーシバル・ローエル（Percival Lowell, 一八五五―一九一六）[43]は安政二年ボストンの生まれだから鷗外より七歳の年上である。[44][45] ローエル家はニューイングランド地方の裕福で教養ある一門として知られていた。パーシバルの家も祖父が大きな紡績工場を経営していて金持であった。知的方面で言えばパーシバルの一歳下の弟アボット（Abbot）は政治学者であり、あとでハーバード大学の総長になった。それも一九〇九年から二十四年もしていて名総長として知られていた。このほか一門にはジェイムス・ラッセル・ローエルがいる。ハーバード大学で詩人ロングフェローの後任に迎えられたが、それより有名なのは「大西洋月報」（Atlantic Monthly）誌の編集長としての活躍であろう。

有名な「ローエル協会」（Lowell Institute）も親類のジョン・ローエルの遺志により二十五万ドルを基金にして設立された。この協会では多くの講師を招いて講演会を開き、ニューイングランド地方の文化向上に貢献した。

パーシバルはアボットと一緒に九歳から二年間をパリ寄宿学校で過ごした。このころアメリカでは南北戦争（一八六一―一八六五）が戦われていたし、弱い母親を転地治療させるためでもあった。幼いときのこの外国生活は後年の彼の旅行好き（globe-trotter）、外国語修得能力の萠芽となったのは確かであろう。やがて南北戦争も収ったので帰国し、ハーバード大学に向けて受験準備をはじめた。

天文学への興味は幼いときからあって、十三歳ですでに2¼インチ望遠鏡で天体観測を始め、とくに火星に興味を

持ったと言う。

二十一歳（明治九年）でハーバード大学を卒業した。古典語、数学、物理学で優秀な成績を挙げた。卒業論文は「星雲仮説について」などであった。卒業の次ぎの年（一八七七）にロシア・トルコ戦争がはじまった。これから近東への興味をそそられ、甥と一緒にシリア旅行をした。ボストンに帰ってから実業家の祖父のもとで紡績業、保険業の実務について学んだ。

このシリア旅行の年にミラノ天文台の天文学者スキャパレリ（Schiaparelli）が8½インチ屈折望遠鏡で火星を観察した結果を発表した。火星の表面に多くの「条痕」（canali）が認められると言うのである。

このイタリア語「canali」が英語の「運河」（canals）と翻訳された。[46] これが火星運河説のはじまりで、やがて火星住人説にまで発展する。[47]

火星は二年毎に地球に接近し、もっとも地球に近づく大接近は十六年毎にくる。スキャパレリ発表の一八七七年はこの大接近の年で明治十年にあたる。この年の九月、西郷隆盛が城山で死んだ。それでこの年の秋、地球に大接近して土星と並んで異様に赤く輝く火星を、夜更けて中天に見た人びとはこれを「西郷星」とよんだ。

スキャパレリは次ぎの接近の年、明治十二年にはこの「条痕」が二重に見えると言う「二重倍化現象」を発表してまた世界を驚かせた。

パーシバルの祖父が亡くなったのが明治十四年で、これから彼の第二の人生が始まる。明治十六年に日本にやって来た。これには当時ボストンを中心に盛んであった日本研究熱に関係がある。

セーラム出身でハーバード大学卒業のフェノローサ（E. F. Fenollosa, 一八五三―一九〇八）が日本に来たのが明治十一年である。しかし、それよりもっと大きくローエルに影響を与えたのはモース（E. S. Morse, 一八三八―一九

二五）の「ローエル協会」における講演であろう。[48] 動物学者モースはフェノローサより一年前に腕足類研究の目的で日本にきていた。そして来た年の六月、横浜から新橋に向う汽車の窓から大森貝塚を発見したのは良く知られている。十月、モースは大学で講義し、進化論を日本で始めて紹介した。十一月に帰国し次ぎの年、明治十一年四月に再び来日した。今度は明治十二年まで日本にいて、帰国してから明治十四年冬「ローエル協会」で日本紹介の講演をした。聴衆の中にはあとでプラグマティズム心理学で有名になるジェームス（W. James, 一八四二―一九一〇）もいたが、ローエルもこれを聞いたのに違いない。

モースはあとでローエル天文台で行った火星観測の結果を「火星とその神秘」（一九〇六）という本にした。[49]

モースは次ぎの年、明治十五年にも日本に来ている。自分が館長をしていた「ピーボディ博物館」（Peabody Museum）[50] のために日本陶器を収集する目的であった。このときビゲロー（W. S. Bigelow, 一八五〇―一九二六）も同行した。ビゲローはローエルの友人であったが変った男で、もとはボストンで外科医をしていた。ハーバード大学医学部を卒業してからパストゥールのところで細菌学を学び、帰国後ボストンで開業した。ところが気が弱くて手術に向かないというので、日本にあこがれてモースに同行して来日した。代だい医者の家で裕福だったからこんな事ができたのである。

日本ではフェノローサと共に日本美術や仏教を研究した。彼が七年間にその財力で集めた多くの美術品は現在ボストン博物館に収蔵されている。

二十八歳のローエルが横浜に上陸したのが次ぎの年、明治十六年の春である。鹿鳴館（Tokyo Club）はこの年の十一月に完成した。三年前には板垣退助を総理とする自由党が結成され、憲法制定、自由民権運動が盛んであった。

ローエルは洋化とその反動の渦巻く日本、童話の世界でない日本を見たのである。

この時分はまだ外国人雑居が禁止されていたから、ローエルは築地明石町の居留地に住んだはずである。ビゲローの手紙によると、ローエルはすぐに日本語がうまくなったそうである。着いてから二週間目、六月八日母に書いた手紙の中でローエルはこう言う。[51]

「またまたですが、日本人への鍵はその没個人主義（impersonalism）にあります。この人たちの話すのを注意して聞くと、まったく特徴がありません。日本語には自他、性の区別がありませんし、複数までないのです。代名詞は持っていますが、これは曖昧にならぬためにだけ使います。同じことは性、複数についても言えます。彼らに感情（feeling）が欠けていると考える人がいますが、これは誤りだと思います。私がここで没個人主義というのは感情（heart）より心（mind）の問題なのです。と言っても今のところ思いついただけなのですが。」

ここでは日本語の特徴から日本人の「没個人性」について考えている。五年あとの「極東の心」で展開する考えの芽がここにすでに顔を出している。この手紙の三日あとで人力車夫の妻が「狐つき」になった。この異常な体験も後年出版する「オカルト日本」研究の動機になっているのだろう。

しかしローエルは長く日本に滞在することができない。通商条約批准のために朝鮮がアメリカに派遣することになった特別使節団八名の随員として、同行するようにアメリカ公使館から依頼されたためである。横浜を出たのが八月十七日で、サン・フランシスコ、紐育、ワシントンと回り十月二十四日にサン・フランシスコから乗船した。横浜に着くのが十一月であるが、ローエルは朝鮮使節と京城まで同行する。長崎、仁川を経て京城に着くのは暮の十二月二十四日となった。約五カ月の長旅であった。

京城には国賓待遇で三カ月滞在し、東京に帰ったのが次ぎの年、明治十七年三月である。しかしこの年の八月には横浜を発ちシンガポール、インドを経てヨーロッパ回りでボストンに帰っている。だからこの第一回日本訪問でロー

エルが日本に滞在したのはたかだか八カ月に過ぎない。朝鮮滞在も四カ月ほどである。

ローエルがヨーロッパへ発ったと同じころ、二十三歳の鷗外もヨーロッパに向っている。彼が横浜を発ったのは明治十七年八月二十四日である。

「まだ二十代で、全く処女のやうな官能を以て、外界のあらゆる出来事に反応して、内に嘗て挫折したことのない力を蓄へてゐた。[52]」

彼はこれから約四年間ドイツに滞在することになる。鷗外がドイツにいたこの四年間はまた、ローエルが日本を離れて主にボストンにいたころと一致する。ローエルがボストンに着いてすぐの明治十七年十二月四日に朝鮮で「甲申の変」があった。日本軍の後押しで開化派の全玉均が企てたクーデターである。このクーデターは失敗に終わり、ローエルと一緒にアメリカに行った正使、副使も殺された。この事件のローエルに与えた影響は大きい。彼はこの事件の詳細を次ぎの年の「大西洋月報」十一月号に発表した。[53] この明治十九年はまた彼の十冊ほどにもおよぶ生涯の著書リストの最初に載せられることになる本が出版された年でもある。

「朝鮮—朝の静けさの国」（Chosön—The Land of the Morning Calm）

四百ページにおよぶ大型の本で図版、写真も多い。[54] 写真はローエルが撮った物である。この時分のことだからまだコロジオン法だったのであろう。三十七章あるうちに第十三章「没個人性の性質」（The Quality of Impersonality）がある。二年後に出版される「極東の心」はこの一章に含まれるアイデアを敷衍した物と考えてよい。

日本ではこの明治十九年にイギリス人チェンバレン（B. H. Chamberlain, 一八五〇—一九三五）が文科大学「博言学」「日本語学」教授に任命された。彼が来日したのは明治六年であるからローエルより十年も早い。ローエルが始めて日本へ来たとき、彼はすでに「古事記」を翻訳し注釈をつけていた。「万葉集」などを翻訳したのはさらにその三年

前である。これはチェンバレンが日本に着いてから六年目の仕事であった。

明治二十一年、二十七歳になった鷗外が帰国する。

「一方の皿に便利な国を載せて、一方の皿に夢の故郷を載せたとき、便利の皿を吊った緒をそっと引く、白い、優しい手があったにも拘らず。[55]」

ボストンで「極東の心」（一八八八）[56]が出版されたのが同じ年である。「極東」と言っても彼の経験は八カ月の日本滞在と四カ月ほどの朝鮮滞在にすぎない。

15. ローエル第二回来日（明治二十二年）とラフカジオ・ハーン

ローエルの二度目の日本訪問は次ぎの年、明治二十二年である。横浜に着いたのが一月八日だが、その一カ月あとの二月十一日、首都東京はお祭気分に浮かれていた。この紀元節の日に大日本憲法が発布されたからである。同じ日の朝、文部大臣森有礼が刺殺された。この事件についてローエルはあとで「ある日本の改革者の運命」（The Fate of a Japanese Reformer）として「大西洋月報」（十一月号、一八九〇）に報じた。[57]

森のことをローエルは「ほとんどアメリカ人」であったと言っている。森は日本最初の駐英公使である。彼はかなり数奇な運命を辿った人間である。[58]慶応元年六月にはロンドンにいた。もちろん鎖国時代だから密航で薩摩藩留学生として来ていた。それからアメリカに渡り明治元年にやっと帰国できた。駐英公使のあと伊藤内閣文部大臣になったのが明治十八年である。

そして明治二十年の暮れに伊勢の外宮、豊受大神宮を参拝して、このときステッキで御帳を挙げた。刺客西野文太郎はこれを不敬としたのである。

着いて早そう年の始めからこんな事件のあった明治二十二年、ローエルは五月から約一カ月の内地旅行をする。東京から能登半島まで行こうと言うのである。この旅行記は二年あとで出版した。

「能登―人に知られぬ日本の辺境」（Noto: An Unexplored Corner of Japan）（一八九一）[59][60]

この本の第一章「見知らぬ土地」によると、日本地図を見て「なにか神秘的な形に突き出している地方」（a province that stood out in graphic mystery）に惹かれて行ってみたくなったと言う。五月三日に上野駅を出て、七尾に辿りついたのが五月九日である。能登は穴水まで行った。かえりは天竜川を筏で下った。日本にはこのあと一カ月ほどいて、六月には日本を離れている。だからこの二回目の日本滞在も約半年と短い。

帰国してから大学同窓会で長詩「Sakura no saku」を朗読した。昨年に出版した「極東の心」最後のページは日本民族へのエレジーである。「このままでは極東人はこの地球上から消滅する。」

「桜の咲く」は、いま咲いている桜の花は華麗だが、これも日本民族と同じようにやがて散る運命にあると言う寓意なのであろうか。

次ぎの年、明治二十三年は一月からスペイン、ロンドンとヨーロッパ旅行をし、六月にボストンに帰っている。こんな旅行は商用も兼ねているのだろう。十一月に「ある日本の改革者の運命」を発表したことはまえに言った。

冬にはヨーロッパ回りで日本に向った。着くのは次ぎの年、明治二十四年四月である。

ローエルがスペイン、ロンドンとヨーロッパを回っていたころ、ラフカジオ・ハーン（Lafcadio Hearn, 一八五〇―一九〇四）が日本に到着している。ハーンはこのころ西インド諸島紀行とか、この地方の熱帯的風物に題材をとった小説「チタ」（Chita）などの作品で少し変った作家だという評判をとっていた。新作「ユーマ」（Youma）の出版契約で「ハーパー出版社」（Harper）を紐育に訪ねた。[61] ここで日本紀行を書かないかと言う話が出たらしい。ハーンは

乗り気になり、日本のことを勉強するつもりで「極東の心」を購った。

読んで感激した彼は、この本をフィラデルフィア市眼科医グルード（G. M. Gould, 一八四八―一九二二）にも、送った。[62]

「あなたに本を送ります。驚くべき本で神様のような本です（god like）。その一字でも逃さずに読んでくださる事を約束して下さい。一字一字がダイナミックそのものです。これは東洋について書かれた本の中で、もっとも素晴らしい本です。小さな本ですが私の書棚の中の東洋関係の本の全部よりも多くの内容があります。それは『The Soul of the Far East』と言う本です。その深遠にして明晰なところは、ショウペンハウエルのようにあなたを驚かすでしょう。」

ハーンはこの文芸愛好家の眼科医グールドと、数年前から文通はしていたがまだ会ってはいない。それでもこのころは日本へ行くまでグールドのところで世話になる約束ができていたのであろう。グールドはあとでハーンの事を悪く書いた本の中で次ぎのように言う。[63]

「私のところに居たときに、ある小冊子が手に入らなかったら、とてもハーンを日本に行かせるのに成功しなかったでしょう。ローエル氏の本が彼の注意を日本に向けさせるのに大きな影響をおよぼし、そして彼をそこに行かせようとする私の説得を大いに助けたのは疑いありません。」

これが明治二十二年の始めのころで、ハーンの日本行きは次ぎの年、明治二十三年春に本決まりとなる。二カ月滞在して日本旅行記を雑誌に掲載し、あとで本にすると言う契約であった。このときの彼は知らないが、この二カ月が十四年となり、彼は日本を一歩も出ないで、この土地で生涯を終える。

画家のウェルデン（C. D. Welden）と一緒に紐育を発ったのが三月五日で、四月四日に横浜についた。すぐに日本

に住む気になって出版社との契約を破棄し、チェンバレンに日本での就職をたのんだ。松江中学校の英語教師として松江に向かったのが八月である。

チェンバレンの方は健康を害したという理由で四年間勤めた文科大学を辞職した。彼の日本研究の百科事典的集大集「日本事物誌」(Things Japanese) はこの年に出版された。昭和十四年までに六版を重ねる。この中の「日本関係書目」(Books on Japan) でローエル「極東の心」を次ぎのように言う。(64)

「ボストン人らしい形而上的な華麗さで (Bostonian metaphysical brilliancy)、日本人の知的特性を論じている。」

鷗外はこの年「舞姫」(一月)「うたかたの記」(八月) を発表した。

「明治二十三年十月三十日　御名御璽」と丸暗記させられた「教育に関スル勅語」もこの年に発布された。

16. ローエル第三、第四回来日と神道研究

昨年の冬からヨーロッパ、インド、ビルマと回って日本に向っていたローエルが横浜に着いたのが明治二十四年四月一日である。彼が旅行している間に四年前の「能登紀行」が「大西洋月報」一月から四月にかけて連載されていた。これはあとで紐育ハウトン・ミフリン社 (Houghton, Miffin) から出版される。この出版社は「極東の心」のときと同じ出版社で、これからあとのローエルやハーンの主な仕事はここから発行されることになる。

ハーンはこの二月に松江中学校教頭西田千太郎の世話で小泉節と結婚した。五月に大津事件がおこった。訪日中のロシア皇太子が警備の巡査津田三蔵に斬りつけられるという不祥事で朝野は聳動した。この皇太子は後のニコライ二世で、二十五年あとの十月革命のとき家族とともに銃殺されるロシア最後の皇帝である。

ハーンはチェンバレンの紹介でローエルと文通するようになったらしい。残念ながらこれらローエルの手紙で公表

された物がない。チェンバレンによるとローエルは文章に凝る方だったらしい。「彼は書いては直し、書いては直して大変な努力を払う。おかしいことに母親に宛てる手紙でもそうなのだ。」[65] それで筆無精である。

一方ハーンは饒舌と言ってよいほど筆まめである。だからハーンの出した手紙の分だけでも残っているはずであるのに発表された物がない。

この年の五月チェンバレン宛の手紙でハーンは次ぎのように言う。[66] いずれも松江からである。

「ローエル氏を尊敬するのは人後に落ちないのです。しかし『極東の心』の説には賛成しかねます。日本人の最も本質的で素晴らしい性質すなわち天才的な『折衷主義』（eclecticism）を無視しております。」「今のところ私の本はローエル氏と同じ本屋から出版の予定ですが別に残念に思われないことと存じます。私がいくら自惚れても『朝鮮』や『極東の心』のような見事な物は書けそうにありません。彼の正確なそして磨かれた完璧な表現の仕事の横に並べると、私のは見すぼらしく映ることでしょう。」

ハーンの本が出版されるのは四年先になる。ローエルの「能登」については次ぎのように感心している。[67]

「ローエル氏の手紙を同封したお手紙を載きました」「『能登』の中で日本人が一番に幸福な人びとだと言っているのは全く正しいと思います」「私は『ローエル』氏と共に能登を一足ひとあし旅行しています。全ての喜び、いろんな危険など、まるで彼にぴったりとくっついて旅をしているように身に迫るのです。」

六月になるとハーンは上京してチェンバレンやローエルに会おうとしている。この計画は実行されなかった。[68]

「私は西田さんとちょっと東京に出ようとしているので、多分あなたとそしてローエル氏にすこしお会いできそうです。時間を割いて頂けますね。」

八月、相変わらず「極東の心」を読んでいる。[69]

「私はローエル氏の本を読みなおしております。フィラデルフィアで読むのも結構ですが、一年半を日本で過ごしてから読むのでは全く違います。しかしその力強さと魅力は以前にまして印象的です。しかしその結論には、少なくともそのある物については、ぞっと致しますので、どこかに誤りがないかと一生懸命に捜しています。」

実証的な業績を積み重ねて来ているチェンバレンは、ローエルの「始めに没個人性ありき」から出発する形而上学に振り回されることはない。ローエルは日本人に触れもしないで理論を組み立てているのだ、とでもチェンバレンは批判したのであろう。これに答えてハーンは言う。[70]

「おそらくローエル氏が一般人と私ほど親しくないと言う御意見は正しいと思います。彼のように個性の強い人は、日本の生活に無条件で順応するのはとても難しい。ほとんど苦痛だと思います。」

ローエルの方はこの六月、日本アジア協会例会で自分の「日本語、ビルマ語同根説」を披露した。[71] そして八月には友人のアガシイ（G. Agassiz）とともに木曽の御嶽山に登った。まえから興味を持っていた「オカルト日本」、神道を研究するためである。東京に帰ってからはさらに山岳神道を神習教管長芳村正乗について習った。ローエルが横浜からアメリカに発ったのが十月二十日であるから、この三度目の来日も六カ月そこそこの短さである。

ハーンの方は松江の冬が寒いと言うので、十一月から熊本の第五高等中学校の英学教師となって赴任した。校長は嘉納治五郎である。ここでは二年後、漱石が英語を教えた。

熊本に移ってからでもハーンのローエル熱は冷めない。一月十四日付のチェンバレンに宛てた手紙では、ローエルの才能とその資産に対する羨望を隠そうとしない。[72]

「深く考える人はだれもローエル氏の本を無視できません。その考えは力強く科学的でその立証が確かなので、それを尊敬し研究しない訳には参りません。私はその両方をしています。その結果、私は彼の考えを大発見と認めざる

を得ません。」「もし私にローエルの天才とローエルの独立があったらどんなに幸せでしょう。彼は行きたい所に行き、見たい物を見、そして書きたい物を書いて本になるのですから。」

ローエルが四回目で最後の日本訪問をしたのが明治二十五年で、この年も暮れに迫った十二月二十五日横浜に着いた。このときは六インチ望遠鏡を持って来ていた。六インチと言うとそれに付属品をつけてかなり嵩張った荷物になる。外国旅行にこんな厄介な荷物を携行したのにはもちろん目的がある。彼はすでに本格的な火星観測を始めるつもりで、この望遠鏡を使って日本で観測に適する土地を捜すつもりだったのである。

ただ東京ではもっぱら土星を観測した。

年が明けて三月、日本アジア協会誌に「秘教神道」（Esoteric Shintō）を連載しはじめた。[73] これは秋まで続き、次ぎの年に出版する「オカルト日本」の土台となった。

このころローエルは熊本行きを計画したらしい。ハーンが四月にアメリカの友人ヘンドリック（E. Hendrick）に出した手紙はそれを告げている。[74]

「嬉しいことに『極東の心』の著者が訪ねてくれるらしいのです。彼は幸せな人で、すごい天才のうえに力強く、若くてしかもお金持ちです。毎年六カ月を東洋で過ごしているのです。」

ところが予定を知らせたはずのローエルの手紙が十六日たっても届かない。それでローエルから問い合わせの電報が真夜中に配達されると言う騒ぎになった。しかもこの電報は宛先が「Kokumeikan」とだけになっていた。これでは「全東洋」とか「東京」だけで電報を打つのと同じだとハーンはチェンバレンにボヤイた。こんな事でローエルの熊本行は立ち消えになった。ローエルとハーンは生涯会うことがなかったのである。

ローエルは夏をチェンバレンと箱根宮の下「富士屋ホテル」で過ごしたあと、年末には伊勢神宮に参拝して大太神

楽を奉納した。そして十二月には横浜を発って帰国の途についた。次ぎの明治二十七年の暮れには火星の接近があるから、それまでに天文台を建設しなければならないので急いだのである。この四回目の来日は滞在が約一年と今までの中でもっとも長かった。ローエルは二度と日本の土を踏むことがない。

このころになるとハーンのローエル熱も少し冷めて来た。この年、十一月ヘンドリック宛の手紙ではこう言う。[75]

「私はローエルの『極東の心』とは反対の立場から『病める個人性』（Morbid Individuality）を書いてみようかと考えております。」

次ぎの年、明治二十七年一月三十日付手紙では、チェンバレンにローエル批判を書いている。[76]

「ローエルは太陽にだけ当って実をつける熱帯の植物そっくりだと思いませんか。彼は自分を味深くする生活の霜を知りません。」「熱帯の果実は見て美しくても美味しくありません。北国の果物は突き刺す風と霜で実るのです。人間でもそうではありませんでしょうか。」

六月十日付の手紙では、自分の熊本での経験を告げる。[77]

「それでもローエルは日本人に個人性（individuality）がないと言います。ここで一年間教えてみたら、まだ見たこともない、とてつもない個人性にお目にかかれるはずです。」

明治二十七年のはじめにアメリカに着いたローエルは本格的に天文台用地の探索にとりかかっている。ローエルにとって「第三の人生」が始った。ローエルはチェンバレンへの手紙で彼に火星について教えたらしい。これをチェンバレンが熊本のハーンに送った。九月十一日付の手紙でハーンは返事をしている。[78]

「ローエルの手紙は面白い物です。最初にスキャパレリの発見を読んだときから、どうして天文学者たちはいわゆる運河（canals）について意見が違うのか分かりませんでした。二重だと言う一方で、いや一本だと言う。ローエルは

真相を突きとめたようですが、そもそも運河とは何なのですか。ほんとうに運河なのか、この惑星の単なる巨大な割れ目か線に過ぎないのですかね。」

ローエルはハーンに余り手紙を書いていない。おそらくボストン上流社会に育ったローエルは、混血で情緒に不安定な「erratic」なところのあるハーンとは肌が合わなかったのだろう。チェンバレンは「日本事物誌」の中でハーン「知られぬ日本の面影」と紹介したうえで「この極めて面白い人物」（Wonderfully interesting personality）は別のところで詳しく書くと告げる。

その項目「ラフカジオ・ハーン」でチェンバレンはおよそ次ぎのようにハーンを批評する。[79]

「ハーンはひどい近眼で近くは見えても遠くは見えない。これは彼の心性でも同じだ。全体としての現実がつかめない。彼の心の中の日本は美しい。だがそんな物は実在しないのだ。同じ事は友人の関係についても言える。彼の心の中に描いた像に少しでも合わないところがあるとすぐに絶交してしまう。」

いかにもチェンバレンらしく、冷静でしかも温かいところが好ましい。

17. ローエル天文台火星観測と「オカルト日本」

三月からアメリカ西南諸州で適地を物色していたローエルは、天文学者ピッカリング（Pickering）からの忠告を入れて、四月にはこれをアリゾナ州フラッグスタッフ（Flagstaff）に決定した。六月から建設に取りかかった。

スキャパレリが六十歳になり視力が衰えて来た。それで四十歳の自分が代わりに火星観測を引き継ごうとしたのが天文台建設の主な動機になっている。ローエルは火星表面を観測するのには大気の状態の安定、いわゆる「シーング」（seeing）の良さを不可欠と考えた。それがフラッグスタッフに決めた理由である。

彼が「火星の丘」(Mars Hill) と名付けた所は海抜二千二百メートルで、先ずそこまでの道を作らねばならない。大工、機械工のための宿舎からその人たちのための食料、暖房の手配までしなければならないから大変である。それでも年末には十二インチ、十八インチ屈折望遠鏡を備えつけることができた。[80] これはまだどれも借り物で名工クラーク（息子）(Alvin G. Clark) が研磨した二十四インチ屈折望遠鏡が据えつけられたのは二年あとの明治二十九年になってからである。四十インチ反射望遠鏡もそのうちに加わった。

この天文台建設の明治二十七年に彼の最後の日本研究「オカルト日本」[81] が出版された。これはハーンの日本物第一作「知られぬ日本の面影」[82] とほぼ同じときに同じ「ハウトン・ミフリン出版社」から出た。ハーンは十一月から神戸クロニクル社に移って新聞に社説を書いていた。そして次ぎの年、明治二十八年には早くもローエルの火星研究「火星」(Mars)[83] が同じ出版社から世に出た。

「オカルト日本」には長い副題がついている。「神がみの道―日本人の個性とその固定観念についての秘教的研究」ローエルが興味をもっているのは、秘儀的な要素の多い神道儀礼や、「物の怪（け）」「狐つき」などの現象である。

「オカルト日本」は八章に分かれていて、最後の第八章はさらに十四に細分されている。そしてその中で「極東の心」と同じように「日本人の特性」とか「個人性」が論じられている。

ハーンが明治二十八年一月、神戸からチェンバレンに書いた手紙ではローエルの新著について次ぎのように言う。ローエルの日本批判は「極東の心」のときでもかなりな物だったが、「オカルト日本」にいたっては非情である。[84]

「私はまだローエルの新しい本を通読できておりません。でも彼はこれを書くのに大変に苦労したことでしょう。全くつまらない冗談でまずくしている所はあるものの、とても器用 (clever) な本です。例のローエル独特の軽く鋭い針で真理の核心に触れています。だが痛ましいまでに非情で、そのメフィストフェレス的なところは私の心を凍ら

せます。科学的ではありますが、同時にこの研究が日本に対すると同じように、ヨーロッパとアメリカにも適用できる点で欠陥があると思えます。でも素晴らしい本であるのに間違いありません。」

二月になるとハーンは「火星」についても書く。[85]

「火星についての報告は全く恐ろしいまでに意味深いものですね。この報告は確かに価値のある物でしょうが、私にはどこまでがローエル自身の理論であり発見なのか分かりかねます。例の『オカルト日本』の中の心理学の生理学的方面の独創性ときたら、医学週刊誌の『雑の部』にも当たらないような物ですものね。」

ローエルのヨーロッパ民族優越の姿勢はハーンにも傲慢と映る。そして自分の新著「知られぬ日本の面影」と「オカルト日本」の評について同じころチェンバレンに告げる。[86]

「ローエル氏が実際にそれに触れることなく（触れようともしないで？）かなり近く真実を迫ったことは認めます。」

「残念ながらまだ『オカルト日本』を読了しておりません。急いで読んだだけだったので、前の手紙では褒めすぎていたのではないかと心配いたしております。他人を傷つけようとする邪念に基づいた、酷く傲慢なこの人の気持だけが私を驚かせます。そのうちに目が治ったら彼の火星の本を読んでみたいものです。私は自分の本が『極東の心』と同じ出来栄えだと言うつもりはありません。しかし奇妙にも私に好意的な批評の大部分はローエルの物よりずっと成功だと言っております。」「かつての『極東の心』は楽しい柔和さで巧みに染められていました。だが『オカルト日本』ではこれが全く消え失せております。」

「知られぬ日本の面影」のあとの方の第十三章に「日本人の微笑」（The Japanese Smile）がある。ここのかなり長い脚注でハーンは「極東の心」の結論に対して反論している。[87] ローエルは個人性の欠除している極東民族はこのままでは滅びると言うのである。

「この名著（this wonderful book）に対して私は熱心なる賞賛を惜しまないが、その結論の多くものに特にその最後のものに対しては全く反対である。」

現在、日清戦争を戦っている日本人は、この民族に伝統的な適応性を発揮して、急速にヨーロッパ化しようとしている。それはそれで民族の滅亡を防ぐ道なのだろうが、これは同時に美しい「古い日本」を失う道である。第十三章「日本人の微笑」は次ぎのようなハーンの詠嘆でおわっている。

「日本の若者はいま古い日本を軽蔑しているが、そのうちにまた振り返るだろう。」「単純な楽しみ、生きていることへの純粋な喜び、自然との愛すべき親密さ、そしてそれらの反映である古めかしい工芸、これらを失ったことを嘆くに違いない。」

18. ローエル「火星とその運河」はどこへ行ったのか

「火星の丘」に天文台を作ってからのローエルは、全くと言ってよいほど日本との関係を絶っている。それでこれからの彼の「第三の人生」については駆け足で見て行くだけにしよう。

クラーク作二十四インチ屈折鏡が完成した次ぎの年、明治三十年にはさらに観測地を捜しにメキシコ、サハラ砂漠、南アメリカに旅行したが物にならなかった。夜は火星、昼間は金星、水星の表面観測という生活の連続にさすがのローエルも疲れて来て、明治三十一年には病気をしてしばらく観測から遠ざかった。火星人の地球侵攻を種にした空想科学小説「宇宙戦争」（The War of the Worlds）をH・G・ウェルズが発表したのがこの年である。(88)

明治三十五年にはローエルが員外教授をしていたマサチューセット工科大学で「太陽系」について六回の連続講義をした。明治三十七年九月にハーンが死んだ。二月に日露戦争が始まっていた。彼の日本研究の集大成「日本―その

解明への試み」(Japan—An Attempt at Interpretation)[89][90]は十月に出版されたが、ハーンはこれを手にすることがなかった。

ローエルの火星研究第二冊「火星とその運河」(Mars and Its Canals)[91]が出版されたのが明治三十九年である。これはこの年「ローエル協会」でした八回の連続講演をまとめた物である。講演は満員の盛況で午前と午後の二回したそうである。友人モースも自分の観測結果を「火星とその神秘」[49]と言う本にした事は前に言った。

明治四十一年にキィス嬢(Constance Savage Keith)と結婚した。ローエルは五十三歳である。新婚旅行先のロンドンでは夫妻で気球に乗り上空から写真を撮った。火星観測の結果と比較するためだったと言う。ソルボンヌ大学ではフランス語で講演をした。「フランス語でしゃべっても彼は同じようにすごい」と言われた。[92]

火星についての最後の本「生命の住家としての火星」[93]が出版されたのはこの年である。彼の関心は次第に太陽系成因に向かい、次ぎの年明治四十二年にはこれについて講義をした。

これはあとで本になった。「宇宙の進化」(The Evolution of Worlds)。[94]

鷗外が「與謝野晶子さんに就いて」の中でローエルの「個人性」説を引用した明治四十五年には、ローエルの関心は二十四年も前の「極東の心」時代とは全く別のところにあったのである。

やがてローエルは海王星の外に存在するかも知れない「惑星X」の軌道を計算し始めた。しかしこの惑星はローエルの計算した位置には観測されなかった。彼が天文台のあるフラッグスタッフの土地で六十一歳の生涯を終えたのは大正五年十一月十二日である。彼の遺骸は二十四インチ望遠鏡の傍に葬られた。

「惑星X」が発見されたのは彼の死後十四年経った昭和五年である。ローエル天文台のトンボー教授(Clyde Tombaugh)が一月二十三日と二十九日に写真撮影に成功した。その結果は三月十三日に発表された。この日はロー

エルの誕生日で、彼が生きていたら七十五歳の誕生日になるはずであった。「惑星X」は「プルートー」（Pluto, 冥王星）と命名された。この惑星の天文学での記号は「P」と「L」を組み合わせた物である。これはまた「Percival Lowell」の頭文字でもある。ただこの発見は「信じられないほどの偶然」の結果だと言うことになっている。[95]

では火星の運河とそれを構築したはずの高度の知能を持つ生物の方はその後どうなったのか。ローエル「火星とその運河」を手にした人は、その中にある無数の運河が整然と張りめぐらされた火星観測スケッチに驚かされる。火星の極には白い「極冠」がある。ローエルはこれを氷と考えた。火星の北半球が夏になるとこの氷は融けて南半球に流れて南半球の極冠に変わる。この水が流れて行く水路が運河である。運河は大圏に沿って走っていて、たいていは二重になっている。運河その物は細くて望遠鏡では見えないが、その運河に沿った緑の森林帯が筋に見えるのである。

運河の交差するところは「オアシス」で、これを囲んで大森林がある。運河に水が極から極に流れて行くと、それに応じて植物が芽を出すから、黒い点が進行波（progressive wave）のように移動するのが観測される。これらの運河は知能を持った生物の構築物である。

以上のようなのがローエルの観測結果と、それから彼が導いた火星像である。その当時でも多くの人がこれに反対した。運河らしい筋の存在を疑問視する人がある。たとえそれは認めても、たいていの人はそれが「運河」で、しかも知的生物によって作られたとするローエルの説には賛意を示さなかった。それでも火星表面の黒く見えるところは植物かも知れないと考える天文学者はかなりいた。

こんなのが一九五〇年ころまでの状況で、そのころになると火星には極端に水が少ないことがわかって来た。極冠は氷でなくて、二酸化炭素が固まったドライアイスであると考えられた。

一九六四年には「マリナ四号」（Mariner）が火星に近づいてその写真を送って来た。[96] 運河らしい物はどこにもない。

月よりは密度は少ないものの「クレーター」が多い。火山の跡もある。細かく見ると海や湖のあった跡が残っていて峡谷もある。かつては表面に水がかなり豊富にあったらしい。一九六七年になると「バイキング一号、二号」(Viking)が火星表面に軟着陸して、多くの情報を送って来た。大気は二酸化炭素を主とする物で気圧は六ミリ・バールに過ぎない。[97] 二号が表面の砂について行なった実験の結果、少くとも表面には生物の存在は認められない。火星が赤く見えるのは酸化鉄を含むこの砂のためで、一年の四分の一ほどは砂嵐が吹く。

それではローエルがあんなに明瞭にスケッチに残した「運河」とは何だったのか。火星の表面の複雑な地形のつながりが、彼の目に筋として見えたのかも知れない。とにかく「錯覚」だったのである。

「極東の心」日本人論では「はじめに没個人性ありき」が彼の固定観念（possesion, 物の怪(け)）であった。火星論でのそれが「はじめに知的生物ありき」ではなかったのか。

19. 「没個人性」と「個人性」

ハーンが日本に来る前に読んで「神様のような」と感激したローエル「The Soul of the Far East」はそんなに大きな本ではない。一二・五×一七・五糎であるから、A5版を二回り小さくした位である。

白い表紙の本で二百二十六ページある。内表紙には赤と黒の「右二ッ巴」紋がある。[109] これは前作「朝鮮」にも、あとで発表する「能登」にも付いている。

次ぎのページの中央には横に一行「Bara no hana ni」とある。ローエルは出版の次ぎの年、明治二十二年六月ハーバード大学同窓会で長詩「Sakura no saku」を朗読する。彼の植物好きは有名である。[98]

これから、この本の内容の紹介に入るのであるが、その前にこの本の題の翻訳について断っておくのが順序だろう。

ふつうは「極東の魂」[110]とか「極東の精神」[111]としてあるからである。

「Soul」を「魂」「精神」と訳して悪いとは思わない。しかし「たましい」「精神」と言うと、すぐに「大和魂」「日本精神」などを連想する。これは何か強い「意志」のある物について使われている気がする。ところがローエルがこの本で解析しようとする心性は極東人の中に「地霊」のように棲んでいる心の状態である。それで私はあえて「魂」をさけて「心」としたのである。

ハーンは神戸クロニクル社から文科大学英文科講師にかわった明治二十九年三月に彼の日本物第二作「Kokoro」（心）[99]を出版した。この本の副題は長い。「日本人の内面生活への手掛かりとその拡がり」（Hints and Echoes of Japanese Inner Life）[100]。この本は第一作「知られぬ日本の面影」の延長にあたる物で、いわば日本に関するエピソード集と言える。ローエルの本のように解析的日本論ではない。

この本に「心」と名付けたのはハーンの日本理解を示す物と私には思える。どうしても英語に変えろと命令されたら彼も「Soul」にしたかも知れない。しかし日本人の心性を表現するのには「心」「ココロ」がその響とともにふさわしいと彼の詩人的感性が教えたのであろう。それで私はハーンに倣って、あえて「極東の心」としたいのである。

しかもこの本の中でローエルがあつかっている例はほとんど日本人に関する物であって、ほかには彼が七カ月ほど接触した朝鮮人の例があるに過ぎない。だから正しくは「日本の心」または「日本人の心」とした方が正しいかも知れない。しかも彼がこの本を書くまでに日本に滞在したのは僅かに八カ月に過ぎないのである。

「極東の心」[56]は次ぎの八章に分けられている。

1. 個人性（Individuality）、2. 家族（Family）、3. 養子（Adoption）、4. 言葉（Language）、5. 自然と芸術（Nature and Art）、6. 芸術（Art）、7. 宗教（Religion）、8. 想像力（Imagination）。

「緒言」と「結論」にあたるところはないが、第一章「個人性」が「緒言」と「概論」に相当し、ここで説明されたテーマが以下の各章で実証されるという形式になっている。そして第八章「想像力」で極東民族の滅亡を予言して終わる。

ローエルが明治十六年春、二十八歳で始めて横浜についてすぐ母に書いた手紙についてはすでに述べた。[51]

「日本人への鍵はその没個人主義（impersonalism）にあります。」

そしてその理由として、まず日本語では代名詞をあまり使用しないこと、名詞に「性」と「数」がない事を挙げている。同じ事はこの年の八月、朝鮮へ行ったときにもすぐ感じた。

「個人の多様性（individual variation）が奇妙に欠けている。[112]」

ローエルは「極東の心」を出す二年前、明治十九年「朝鮮」を出版するが、この第十三章「没個人性の性質」（The Quality of Impersonality）では、この線に沿って朝鮮人の心を分析している。この章は僅か十ページほどであるから、そんなに詳しくは論じられていないが、彼はやはり代名詞を使わない朝鮮語の特長と家族の構成などから、朝鮮人における没個人性を解剖する。

こう言う訳でこの二年あとに発表した「極東の心」は「朝鮮」第十三章の内容をさらに詳しく極東人全体に敷衍した物と考えてよい。

ローエルにとって極東人の心性の中でもっとも奇異に見えたのはこの「個人における多様性の欠除」である。これを母の手紙では「没個人主義」（impersonalism）と表現したが、「朝鮮」ではすでにこの言葉は使わず「没個人性」（impersonality）に統一している。

没個人性とは「それぞれの人がその人に個有の『個性』（人格、personality）を持たない性質」を言う。反対に「そ

れぞれの人が個有の『個性』を持つと言う性質」が「個人性」（individuality）である。[113] そしてこの「個人性」の方は「朝鮮」の中には一回も出て来ない。これが始めて出て来るのは「極東の心」第一章であるが、ここでも始めに出て来るのは「没個人性」の方である。

「この国の履歴を汚すように作用した性格の中で、もっとも大きいのは『没個人性』という大きな特性である。」

そして、このあと二ページ目に始めて「個人性」が登場する。「そもそも個人性という物が実在するであろうか」という議論である。ここでのローエルの議論は「個人性」を「個性」に置き換えた方が筋がとおるようにさえ見える。もともとローエルは自分の多用する「没個人性」「個人性」にちゃんとした定義を与えてはいない。それもあって、訳には今までいろんなのが提出されている。主な物だけで次ぎのとおりである。[90][110][111][114]

「Individuality」―個性、個我、人格性、個人性。形容的に使って「人格的」。

「Impersonality」―没個性、非人格性、非我、没個人性。形容的に使って「非個性的」「没個人的」「非人格的」。

この中で「個性」「個我」であれば別に「individuality」を使わないで「personality」（個性）だけでもよいはずである。しかし「個性」だけでは、この「個性を持つという性質」の意味が出ない。しかも「individuality」と「impersonality」は対立概念だから、訳語はその対立が見てわかるのが望ましい。そこで私は鷗外がすでに使っていることでもあるので「individuality」を「個人性」とし、その対立概念である「impersonality」には「没」をつけて「没個人性」としたいと思う。これらを形容的に使うときは「個性的」「没個性的」がよいだろう。

もともと「没個人性」とか「個人性」は、民族などのような一つの集合体に使用するのが本来の使い方であろう。「日本人には個人性が認められない。」これなら良い。ところが鷗外は「極東人の特性は個人性の無い処に在る」とローエルの言葉を引用したうえで、そんな事はない「晶子さんを見せて遣りたい」と続ける。

なるほど晶子は傑出した「個性」を持つ女詩人である。しかしこれが「極東人全体の個人性のないこと」の反証にはならないだろう。晶子一人が優れた個性を持っているからと言って「それぞれの人がその人に個有の個性を持つという性質」が日本人全体に備っているとは言えないからである。

ハーンは熊本からチェンバレンに手紙を書いてローエルに反論する。「ここで一年も教えたら、まだ見たこともない、とてつもない個人性（extraordinary individuality）にお見にかかれるはずです。」[77]これも上と同じ理由から誤った用法と言えるかも知れない。ただし、すでに指摘しておいたようにローエル自身が「個人性」と「個性」を同じ意味に使用しているところもある位だから、そう厳密に考えなくても良いのだろう。現にローエル「極東の心」の中で「one's individuality」[115]と使っているところがある。

20. ハーバート・スペンサー「社会進化論」とその影響

ローエル「極東の心」の中にハーバート・スペンサー（Herbert Spencer, 一八二〇―一九〇三）の名前は一度も出てこない。しかしスペンサー「社会進化論」の影響は顕著に見てとることができる。チェンバレンは「日本事物誌」の中でハーンを評して「ラフカジオにとってスペンサーは霊感に満たされた予言者（an inspired prophet）だ」[116]と言っている。ハーンの方もそれを隠そうとしない。

「神国日本」の中で「私はあえて自分をスペンサーの生徒とよぶ」とまで言っている。[117]

スペンサーの八十三歳の生涯は、ほぼ明治維新を中心にして明治三十六年にまでまたがっている。これは日本の興隆期に一致する。同じことは南北戦争を中心にしたアメリカ興隆期にも言える。「進化」「進歩」を旗印にしたスペンサーの哲学が、この二つの国でとくに重視されたのは意義のないことではない。

この時期「進化」は「進歩」と同意義とされた。

いまでこそ忘れられているが、この時代の思想界におけるスペンサーの影響は、測り知れぬほど大きかったのである。

一八五〇年（嘉永三年）スペンサー三十歳のときに出版された「社会静力学」（Social Statics）は多くの国語に翻訳された。これはベンサム（J. Bentham, 一七四八―一八三二）流「最大多数の最大幸福」（greatest happiness of the greatest number）に進化論を加味した物だと批評された。ダーウィン（C. Darwin, 一八〇九―一八八二）「自然淘汰による種の起源」（On the Origin of Species by Means of Natural Selection）は一八五九年（安政六年）に出版されたが、この本が出版される前からスペンサーは「生存競争」（struggle for existence）とか「適者生存」（survival of the fittest）などを使用していたのである。

新しい物好きの福沢諭吉はすぐにとび付いている。なにしろ慶応義塾ではすでに明治十年の試験のとき、「優秀」の生徒にスペンセル氏「ソシアル・スタチックス」一冊を与えたと言うほどである。[118] 同じ年、尾崎行雄はこれを訳して「権利提綱」として公刊した。「社会静力学」はまた明治十四年「社会平権論」（松島剛訳）として出版された。板垣退助はこれを「民権の教科書」と呼び、土佐の立志社では数百部を電報で注文したと伝えられている。なにしろ良く売れたので訳者の松島は始めの翻訳料二十五円を、二千五百円にしてもらったほどだと言う。[119]

スペンサーの根本思想は「進化」にある。生物体の進化から類推して、彼はその方向を次ぎのように規定した。

「未定形、未組織の同質性から定形、組織化の異質性へ」（from an indefinite, incoherent homogeneity to a definite, coherent heterogeneity）。これによって「個性化」（individuation）が増大する。ローエルはこれを民族の心性に適用して「個人性」（individuality）としたのである。変化は生物体のように突然変異（spontaneous varia-

tion）によっておこるが、その結果生じた変種の生存を決定するのは競争による「適者生存」である。この生物体から導いた「進化法則」をスペンサーは生物学から地質学、心理学、社会学、天文学に至るまでに拡張し適用する。

それは宇宙の果てにまでおよぶ壮大な原理である。

一八六〇年（万延元年）四十歳になったスペンサーはこの線に沿って、一つの「大思想大系」を構築しようと決心する。彼はこれを「綜合哲学」（Synthetic Philosophy）と呼んだ。この方面の著作の第一冊が「第一原理」（First Principle）（一八六〇―一八六二）である。これはこれから続くはずの「綜合哲学」数十冊のいわば「プログラム」である。[120] この本の目次を一覧した人はだれもその壮大な構想に打たれる。時間、空間、運動、力、分子から説きおこした「進化法則」は社会、芸術、言語はては宇宙にまでおよぶのである。

このプログラムに沿ってスペンサーは「ヘラクレス的力業」を続ける。「生物学原理」「心理学原理」「社会学原理」「道徳原理」がこれである。これらは主に分冊で予約制にした。始めはその継続が危ぶまれたが、アメリカから多量の注文があって続けることができたと言う。ガルブレイス「不確実性の時代」[121]によると一八六〇―一九〇〇年の間にアメリカでは約三十六万冊の彼の本が売れたと言う。本屋もほとんどなく、ペーパー・バック本でもなかった時代であるから大変な数である。清教徒的「進歩」の思想とともに、スペンサーの「思想がアメリカ資本主義、新興資本家たちの必要に手袋のようにピッタリと合った」からであった。

一八八二年というと明治十五年でローエルが日本にやって来る一年前である。この年、六十二歳になったスペンサーがアメリカを訪問した。それは凱旋将軍のように歓迎された。まるで「ダビデの子にホサナ、讃むべきかな」と群衆に迎えられたイエスのエルサレム入りに匹敵したとまでガルブレイスは言う。

当時ボストンにいたローエルが感銘を受けないはずがない。

21. ハーン「神国日本」と日本の将来

日本でスペンサー「社会進化論」が注目されたのには別の理由もある。「第一原理」で社会の進化について彼は次ぎのように言う。どの社会も始めは未分化で同質的である。それは奴隷型社会であったり軍事型社会であったりする。この同質性は変異によって分化し、異質性を帯び、個性を持った産業、技術が発達する。さらにこれが組織化されて工業型社会にまで進化するのである。

異質化しても「混沌」に至らないのは、淘汰によって選別されて適者だけが生存するからである。適者でないものは解体する。「第一原理」の終わりの方「社会の解体」(Social Disin tegration) では日本社会の例が引かれている。これにはスペンサーの注があって、ここで彼はこれが一八六七年（慶応三年）に書かれた物だと断っている。

「新しい外部の力から隔離されていた間は、ほとんど恒久的な状態が維持できた。しかし日本が一方からは武力侵略により、他方からは商業、思想によってヨーロッパからの衝撃を受けると、その組み立てが解体しはじめる。現にそこには現在、政治的な解体が進行しつつあるのだ。」

明治六年、二十七歳の森有礼は代理公使としてワシントン市にあり郵便交換条約調印全権をしていた。次ぎの年に賜暇休暇で日本へ帰る途中、彼はスペンサーを訪ねて日本のとるべき道について尋ねた。森はあとで明治十一年から十七年まで英国公使であったが、この時にも新しく作られた憲法草案を示して意見を求めている。ただスペンサーの示した意見はひどく保守的で漸進的なものであったから、日本政府の採用するところとはならなかった。しかし、このあと日本の高官でイギリスを訪れる人はだれもが、スペンサーの門を叩くのが習慣のようになってしまった。明治二十二年に発布された帝国憲法を起草したのは金子堅太郎である。この金子がスペンサーに憲法発布後の日本の採るべき道について助言を求めた。これに答えた明治二十五年八月二十六日付の手紙はずっとあとの「タイムズ」紙明治三

十七年一月十八日号で発表された。スペンサーは前の年、明治三十六年十二月八日に死亡していたのである。

彼の意見は相変わらず保守的で漸進的である。たとえば日本がイギリスのような議会制度を採るのには、百五十年もかけなければならないと言うのである。条約改正にしてもこのままが良いと言う。ヨーロッパに日本における足場を与えてはいけない。隔離しておくに越したことはないとする。

ハーンは自分も言うように「スペンサーの生徒」だから、このスペンサーの手紙をちょうどこのころ出来上がった、彼の最後の著書「神国日本」の最後に付録として付けた。[122]

ハーンもスペンサーと同じように日本の将来について悲観的だったのである。

ハーンは二年前の明治三十五年から長男一雄の教育のこともあって一時アメリカへ帰国しようかと考えていた。アメリカにいたときの古い記者仲間ウェットモア夫人が運動してくれてコーネル大学で一年間講義ができるかも知れないという事態になった。それでハーンも乗気になり、二十回分の講義の用意を始めた。ウェットモア夫人は筆名ビスランド（E. Bisland）で、あとでハーンの伝記と手紙をまとめて出版した人である。

明治三十五年十一月付の手紙でハーンは次のように言う。[123]

「私は日本についての連続講義をしてもよろしい。心理、宗教、社会そして芸術的見地から、日本について聞く人の心に、他の本にあるより別の考えを与えるようにします。多分ローエル『極東の心』（日本に関する本の中で比較を絶して偉大でもっとも深遠な作品です）」の線のような物になるでしょうが、ちょっと別に観点からです。」

次ぎの年、明治三十六年七月ごろにはほぼ出来たらしい。[124]

「講義の力点は日本社会はキリスト生誕千年まえのギリシャ人社会と同じ条件にあることを言うのです。私は宗教的日本を言っているので、芸術や経済から見た日本を言っているのではありません。これも説明のために触れます

が、この種の物で英語ではローエル『極東の心』が唯一のものです。しかし私は原因と進化について全く別の見解を持っているのです。」

しかしハーンはすでに一月、文科大学から解職の通知を受けていた。コーネル大学講義用に作った草稿が「神国日本」になったのである。

これを始めて訳したのは戸川明三（秋骨）[11]である。ハーンの本の題は単に「Japan」であったが戸川はこれを「神国日本」とした。おそらく表紙に「神国」という丸印のデザインが付いていたからそうしたのであろう。ハーンはこの本を書くのに苦労したらしい。「この本は私を殺します」と言っている。もともと詩人肌の男だから、こんな分析的な本には向かない。

「神国日本」はスペンサー流社会進化論を日本社会の過去から現在、未来に適用して見せた物と言えよう。公式を使って応用問題を解く努力をしたのである。ウェットモア夫人への手紙でも触れているように、ハーンは古い日本社会を古代ギリシャ社会に比定している。この時の彼の参考書はド・クランジュ「古代都市」（一八六四）である。

「神国日本」はその邦訳が「東洋文庫」[90]の一冊になっていることでもあるから、その内容を紹介するのは止める。しかし、これがスペンサー流進化論に終始していることは、各所に挿入されているスペンサーの著作からの引用の多さからも知れる。とくに第十一章「大乗仏教」（The Higher Buddhism）ではその五分の一がスペンサーからの引用で占められている。全部で二十二章であるが、その第二十一章「産業の危機」（Industrial Danger）は明治三十年代の日本の現状について悲観的である。[125]

「この国の賞賛すべき陸軍も英雄的な海軍も、政府の力では押さえ切れない事情に挑発され、または激発されて侵略に向い、貪欲な諸外国の連合軍を相手に無謀な戦争をはじめて、自らを最後の犠牲にしてしまう運命にあるのでな

かろうか。」

このころ日本でも遅まきながら産業革命が始まり、労働組合が組織され、ストライキが続発するようになっていた。石川啄木のいう「時代閉塞」のはじまりである。

22. ローエル「極東の心」と「極東民族滅亡論」

チェンバレンはその「日本事物誌」の中でローエル「極東の心」を評して「華麗なボストン流形而上学」[64]と言っている。あとでローエル「日本人没個人性」に反論を書いたギューリックも「才気煥発だが誤りの多い」(brilliant but fallacious)[126]と言う。いずれも「brilliant」という言葉を使っている事からもわかるように、この作には確かに新進気鋭三十三歳の俊英ローエルの気負いが感じられる。

一体に堅実な分析というより気分で書いているような所が多い。

華麗な文体はよいのだが、これに釣られて読んで行って、さてこれを出来るだけ忠実に日本文に訳そうとすると当惑させられる。気分としては理解できても論旨が酌みにくい。おまけに詩的表現や倒置文が多い。参考までに第一章「個人性」のところの訳文を「付録」として載せておいた。すでに単行本[110]として刊行されている翻訳と同じように、私のこの試訳も成功した物とは言い難いだろう。

次ぎにすでに紹介しておいた全八章の内容を簡単に説明しておこう。ただしこれは私が筋道をつけて要約した物で、原本の論旨はこんなにわかり易くない。

第一章「個人性」

日本人は地球の反対側に住んでいる。だからと言う訳ではないが、文字は反対に書くし、何でも反対である。ここで

は思想は外国から輸入するばかりで、しかもそれを同化することをしない。接ぎ木のように元木は昔のままである。利子を喰って生きているのだから、その内に元金までなくしているのに気がついて驚くだろう。

「日の出の国」は朝だと言うのに、すでに眠っているのだ。「不適者生存」の不思議なサンプルである。「没個人性」はアメリカ、ヨーロッパ、インド、シナと東へ行くに従ってひどくなり、極東の端の日本で最大となる。「個人性」が認められないと言うのがこの国の特徴である。「没個性的」(impersonal) 国民は大人にならない。日常生活の習慣、言葉、宗教には一民族の過去と現在、そして未来への願望があらわれている。これから、それらを分析してみよう。

第二章「家族」

正月が来るとすべての人は、その誕生日に関係なく一斉に歳を加える。これを見ても個人性の欠除がわかる。結婚は当人の意志より家族間の商取引で決められる。そして男女の間に恋愛と言うものがない。極東社会の単位は個人より、むしろ家族である。そして家庭内では儒教に従って家父長制であり、教育、職業の自由がない。

第三章「養子」

これも接ぎ木である。年老いると人は隠居をする。ここでは個性を捨てて生きながら涅槃（ニルバーナ）に入るのである。

第四章「言葉」

人称代名詞をほとんど使用しない。よほどの事がない限り「I」「You」「He」の区別を明確にしない。この国では責任を明確にしたり、「個性」を表に出してはいけないのである。名詞には「性」も「数」もない。ヨーロッパ語では無生物にも「性」を付けるのに極東の言葉にはそれがない。これは想像力の欠除を意味する。「私は無を知る」(I know nothing) という言い方がない。「無」というような抽象概念は、自然の中に没入しているような民族にはできない発

想である。

第五章「自然と芸術」

この国民は科学には縁がないが美の感覚は鋭い。ここでは人間はその個性を捨てて、自然の中に埋没し自然に従う。ヨーロッパ人のように自然を征服しようなどとは考えない。この国民はヨーロッパ民族の中でもっとも没個性的なフランス人と「礼儀正しい」ところが似ている。日本では美の理想は自然の中にあって人間の中にはない。だからヨーロッパ人のように婦人の肉体美を称賛しない。

第六章「芸術」

芸術は主に花と動物、とくに鳥を主題とする（花鳥画）。古代ギリシャ人は肉体の美しさを称賛し、これを写したのに日本人はそれを隠すのである。彼らにとって画は詩であって描写ではない。自己を捨てて自然の中に浸るのである。これは気候にもよる。ここでは季節までが個性を失って温帯と熱帯が同居している。

「ここでは温帯と熱帯がそれぞれの個性を忘れて忘我の口づけに耽っている。」

第七章「宗教」

キリスト教は「個性的」(personal) 宗教である。ここでは個人の存在を意義ある物としてとらえ、個人は永遠に救われる。それに反して仏教は厭世的で「没個性的」(impersonal) である。それはこう教える。この現世の姿はすべて幻なのだ。この幻の背後にある、悩みから解脱した自然の大いなる「没個性的」霊 (great impersonal soul of nature) を希求せよ。そして人は忘我の涅槃の中に至福を見出すのである。

第八章「想像力」

ここでローエルはスペンサーの名前を出していないが、彼が展開する論旨はスペンサー流その物である。進化には突

然変異（spontaneous variation）を必要とする。これによって単純な同質性から複雑な異質性に分化する芽が出る。人間社会にあっては想像力がこの突然変異に相当する。想像力こそが個性化の源泉なのである。これが極東人には欠けている。だから彼らは自分らを「日の出の国」とか「朝の静けさの国」とか呼んでいるが、朝を迎えたばかりだと言うのに、すでに夜の薄明の中にまどろんでいる。

「極東の心」は次の言葉で終わる。[127]

「もしこれらの国民が旧い在り方を続けるならば、この人たちのこの世での将来はない。極東の民族たちが自分たちを変えなければ、朝が昼になるように確実に、彼らはヨーロッパ先進国の目の前で消える運命にある。彼らはこの地球表面から消え失せて、この惑星を日の沈む国の住民たち（中崎注：ヨーロッパ民族）の手に委ねることになるだろう。彼らの新しく輸入した思想が着実に根づかない限り、日本人、朝鮮人、そしてシナ人は最終的にこの世界から締め出されてしまう。彼らのためのニルバーナ（涅槃）はすでに来ているのだ。自分たちの国に与えた予言的な名前――日の出の国、朝の静けさの国――にたがわず、まだ夜が明けたばかりだと言うのに、極東アジアの人びとはすでにニルバーナの屍衣に包まれている。」

ハーン「神国日本」はこの「極東の心」を踏まえて書かれている。ウェットモア夫人への手紙にあるように「ちょっと別の観点から」とか「原因と進化について全く別の見解を持っている」とは言うものの基本的にはスペンサー流であるのに変わりはない。ただ「神国日本」の方は日本歴史の流れに沿って、スペンサー社会進化論を適用しているところが違う。しかし二人とも日本については悲観的な結論に到達しているのは同じである。ただローエルは「このままでは」と留保をつけ、ハーンの方は賢明な日本政府に期待する。

「神国日本」第二十一章「産業の危機」は次ぎのように終わる。[125]

「ただこれまで多くの嵐の中で日本を導いて来たあの政治的手腕（statemanship）が、この迫まり来る危機にもその力を発揮してくれるとよいのだが。」

ローエルもハーンも「スペンサーの生徒」らしく、ともに先生に倣って悲観論に終始している。

ところがハーン「神国日本」と同じ明治三十七年に出版されたギューリック（S. L. Gulick, 一八六〇―一九四五）「日本人の進化―その社会と心理」（Evolution of the Japanese—Social and Psychic）[126]の所論はこれらの悲観論に反対である。

彼もハーンと同じように古代から日本歴史を辿りながら、日本社会の変遷を考察している。この同志社大学や京都大学でも教えたことのある牧師は、とくにローエル「日本人没個人性」説に反対する。これはこの本の全三十七章の中で最後の方の数章の題目を見るだけでわかる。

第三十章「日本人は没個性的であるか」、第三十一章「日本人は没個性的ではない」、第三十二章「仏教は没個性的か」、第三十三章「神道、仏教、儒教における個性の痕跡」。

ギューリックは日本人の敏感な順応性を強調する。日本人が没個性的で想像力に欠けるのは、これまでの環境によるのだ。彼らは現在の新しい環境にすぐに順応し、これから多くを学ぶに違いない。

大正七年シュペングラー（O. Spengler, 一八八〇―一九三六）は「夜の国の没落」（Der Untergang der Abendland）[128]と説き始める。「夜の国」はもちろん「日の出の国」の反対側にあるヨーロッパである。

23. 鷗外はなぜ「ローエル」を「ロレル」と誤ったのか

鷗外「與謝野晶子さんに就いて」の中で「Percival Lorell」は、極東人の個人性と共に出てくるのであるから、

「Lowell」の誤りであることは明らかである。綴字「w」と「r」一字の誤りであるが、これは中央公論発表のときからそのままで、その後に編集されたどの「全集」でもそのままであるし、後記もこの誤りについて触れるところがない。鷗外は正しく「Lowell」と書いたのだが、中央公論の植字工が「w」を「r」に拾い間違えたとも考えられる。ただ私が「鷗外全集」に写真版で載っている原稿などで検べた限り、鷗外の「w」と「r」は明瞭に区別できる字体で書かれている。

反対に鷗外の原稿には始めから「Lorell」とあったのかも知れない。これらは彼の原稿を見ない限り解決できない問題である。しかもこんな原稿用紙二枚にも充たない草稿が残っているとは考えられない。すると残る問題はこの個人性について説いたアメリカ人「ローエル」と、天文学者「ローエル」が同一人物であることを鷗外が知っていたかどうかである。

「與謝野晶子さんに就いて」が書かれた明治四十五年までには、ローエルの火星に関する三つの主著はすでに出版されている。そしてH・G・ウェルズ「宇宙戦争」[89]が発表されたのは明治三十一年である。

だから火星の運河と火星における知的生物の生存について大胆な説を出して、世界の話題になっていたこのアメリカ人天文学者「ローエル」の名前を鷗外が知らないはずはない。問題はこの天文学者「ローエル」と個人性の「ローエル」が同一人物であり、しかも日本に四回も来ていたのを彼が知っていたかどうかである。もし知っていたら「Lorell」と書く可能性は非常に少くなる。ただ鷗外は大文字でなら「PERCIVAL LOWELL」と正しく印刷された単行本を出している。明治三十七年春陽堂から発行した「黄禍論梗概」である。この原本[129]はドイツ語で、鷗外はこの内容を明治三十六年十一月早稲田大学課外講義で説明した。これを本にしたのである。当該の個所を次ぎに示す。[130]

「扨日本人と支那人との精神上の能力を比較すると、日本人には考える力、思量の力が全然無い。抽象として道理を

考えることが出来ない。此精神上無能力の結果として、日本人は物の真似をする。恰も催眠術を施されて、術者に自由に使はれてゐると似ている（PERCIVAL LOWELL）。」

「PERCIVAL LOWELL」は原本の文献にあったところをそのまま書き入れた物で、鷗外がローエル原著に遡ってチェックしたのではあるまい。それにこの日本人とシナ人の比較の文章は私が調べたかぎり、このままの形では「朝鮮」「極東の心」「オカルト日本」の中には発見できなかった。

しかも「黄禍論梗概」は個人性についてどこにも論じていない。

では鷗外はこの個人性の「ローエル」をどこから知ったのか。私は「與謝野晶子さんに就いて」の中で「此頃」と鷗外が書いているところにその鍵があるように思う。「極東の心」は明治二十一年に出版されている。鷗外が與謝野晶子論を書いているのは明治四十五年だから二十数年も前である。「此頃」どころではない。

ただ「此頃」にあたる一年前の明治四十四年に紐育マクミラン社から挿絵入り「極東の心」の新版が出ている。[131] 鷗外は「黄禍論梗概」の例言の中で、自分は白色人種が黄色人種をどう見るかについて興味を持ち「十年前当りから、種々の著述を蒐集致して居ります」と書いている。だからこのローエルの新版を購入した可能性は否定できない。だが、すでに説明したように「極東の心」は辞書を引いた位では読みとおせない代物である。

鷗外はポー「モルグ街の殺人」を紹介するのにドイツ訳からの重訳をしている位だから、[132] 英語には自信がなかったに違いない。同じ種類の本があったらドイツ語で書かれた本を購ったであろう。

鷗外があるいは目を通したかも知れない「此頃」のドイツ語の本に、同じ明治四十四年出版されたドイツ語訳「極東の心」（Die Seele des Fernen Ostens）がある。[133] 東京大学付属図書館に照会したところ、この本は「鷗外文庫」の中にはないと返事があった。だからと言って鷗外が購入しなかったとも言えないし、読まなかったとも言えない。だが

この本がドイツで出版されたのが前の年であり、「與謝野晶子さんに就いて」を書いたのが五月である事を考慮に入れると、鷗外はこの本のことと、その「個人性」に関する概要とを彼がとっていたドイツ新聞の書評の中ででも知ったのだと考えるのがもっとも妥当だと言う気がする。[134] 書評にはそんなに詳しい著者紹介はないだろうから、天文学者ローエルと「極東の心」のローエルが同一人物だとはわからない。

また、たとえ鷗外がドイツ訳を手に入れていたとしても、この黄色の表紙で一七七ページの小冊子は翻訳だけに終始していて、ドイツ文による訳者緒言とか著者紹介などは全くない。

そこで鷗外は與謝野晶子論にうろ覚えで「Lorell」と書いた。

彼が馴れたドイツ語には「Löwe」などの綴りはあっても「Lowe」と続く字はない。それに引きかえて「Lorell」の方なら有名な「ローレライ」(Lorelai) を始めとして「Lore」と続く字はいくつかある。だから、うっかり「Lorell」と書いてしまったのではなかろうかという推理が成り立つ。

おそらく鷗外は「個人性」のローエルと火星学者ローエルが同一人物であることを知らなかったのではあるまいか。同じ事はいままでの「鷗外全集」の編集をしたり後記を書いた人びとについてもいえる。

おわりに—晶子の帰国と明治の終わり

四月石川啄木が死亡し、五月晶子がヨーロッパに向った明治四十五年、鷗外の創作活動は相変わらずである。

一月「かのように」「不思議な鏡」四月「鼠坂」五月「吃逆」六月「藤棚」八月「羽鳥千尋」九月「田楽豆腐」。

この中で「かのように」「藤棚」「吃逆」は次の年の「鎚一下」とともにいわゆる秀麿物である。鷗外にとっては啄木のいう「時代閉塞」状況に対する回答の一つなのであろう。あとで解剖してみたら時代の病状と、それに対する鷗

外の反応が浮び上がって来るだろうという意味で、これらにも病理標本としての価値があるのかも知れない。しかしとても一流の文芸作品とは呼べない代物ではなかろうか。「田楽豆腐」にいたっては特にひどい。

人物評論「與謝野晶子さんに就いて」を書いてからすぐ、羽鳥千尋の容態が悪くなったと言う知らせが来た。[102]

六月十九日（水）、晴。服部千尋危篤なるを聞き、石田吉治を派遣す。

七月十七日（水）、晴。羽鳥千尋を稿し畢る。

まえから心配だった明治天皇の病が重くなって来た。

七月二十日（土）、晴。退衙後聖上不豫の事を承る。

七月二十一日（日）、晴。夜田楽豆腐を書き畢る。

七月三十日（火）、晴。薄き白雲。午前零時四十三分天皇崩ざさせ給ふ。

この日から大正元年と称することになる。八月三日には母峰子が於菟を連れて日在の別荘に発った。彼等は八月二十四日まで滞在する。明治天皇の大葬が九月十三日にあった。

九月十三日（金）、晴。午後八時宮城を発し、十一時青山に至る。翌日午前二時青山を出でて帰る。途上乃木希典夫妻の死を説くものあり。予半信半疑す。

朝になって鷗外は赤坂の乃木邸へ行く。

九月十八日（水）、半晴。午前乃木大将希典の葬を送りて青山齋場に至る。興津與五右衛門を艸して中央公論に寄す。

これが「中央公論」十月号に掲載された。鷗外の筆の早さには定評がある。正味二晩もかかったのであろうか。ただこの時の作品はあとで創作集「意地」に集録された物とかなり違う。

なにしろ二晩ぐらいで書いた物だから、手元にあった「翁草」とか「徳川実紀」ぐらいしか参考にしなかった。こ

れを後で集めた史料を元にして改稿したのである。この改稿版[103]では史実に従って弥五右衛門の切腹は見物人の大勢いる晴がましい場所でした事に改めた。

ところがオリジナルの作品で弥五右衛門は「桑門同様の渡世」をしている貧乏な浪人者である。灯の下でこの遺言を書いているが灯油も尽きてしまった。点灯けなおすことはない。皺腸は雪明りでも切れる。[104]

私はこの方が好きだが、鷗外の「歴史其儘[105]」はこれを許さない。

五月にパリに着いた晶子は鉄幹と九月までイギリス、ベルギー、ドイツ、オーストリア、オランダとヨーロッパ各地を旅行した。しかし子供のことも心配だし自分も妊娠したと言うので帰国することにした。帰りは来たときと違って海路をとり、マルセーユから船に乗った。それが十月で十月末には神戸に着いた。

十月二十六日（土）、晴。道末だ乾かず。金尾種次郎来て與謝野晶子が二十九日神戸に着くことを話す。

この二十九日には金尾が晶子からの伝言をつたえた。

十一月二十九日（金）、晴。阿部一族を脱藁す。

「興津弥五右衛門の遺書」に続く「意地」物の第二作である。こうして鷗外も五十一歳になって始めて、鷗外らしい「個人性」ではない「個性」が顕著に認められる作品を書き始めたことになる。

晶子が帰朝報告とお礼にやって来たのは、大正元年と改った年の暮も押しつまったころになった。

十二月二十七日（火）、晴。泥濘。與謝野晶子陸軍省に来訪す。

文献の収集に御協力願った大阪大学　付属図書館　参考掛　宮岸朝子、東田葉子、和田山祥子、中京大学　付属図書館　平田伸夫の諸氏に、その日頃の御厚情に対して厚く感謝の意を捧げさせて載く次第である。

付録　ローエル「極東の心」第一章「個人性」（翻訳）

1.「個人性」（Individuality）

地球の反対側では、当然なんでもアベコベ（upside-down）になっているものだという子供っぽい考えが、横浜に一歩足を印したときに突然、蘇えってくるのは驚きである。地球上の位置からあたり前だと子供っぽく考えていたこと—ここでは原住民が毎日、頭を地につけて立つ芸当を平気でしている—が誤りなことはすぐに悟るが、同時にそれでもこの国の人びとは、そんなとんでもない姿勢で世の中を眺めているらしいこともすぐに気がつく。

というのは、この人びとはなんでもアベコベ（topsy-turvy）に見ているらしいからである。地球の裏側だから、この国の人の頭がアベコベなのか、それとも観察しているわれわれ外国人が、今まで自分の網膜に映る倒立像を修正するのが誤っていたのか。いずれにせよ、結果に変りはない。世界はアベコベなのである。

外国人は自分が正しいものとして、迷いもなく日本人の見方が誤っているとする。日本人の心の中は彼らの猫のような「つり眼」からもわかるではないか。

たとえ、アベコベの度合いが、初めに思ったほどでなかったとしても、とにかくびっくりさせられるし、これはよりリアルですらある。子供のころ無邪気に考えていたのと違って、地球の裏側のこの国の人びとが天井にとまっている蝿のように、頭を地につけていないことが実地に見て納得できても、この国の人びとの心はやはり全然アベコベに見える。

少なくとも知能の働きという面からは、その姿勢は重力に逆っているとしか見えない。心という見地からすると、この国の人の世界はわれわれ外国人の世界に対する、一つの巨大にして滑稽なアンチテーゼである。

われわれの見地から直観的にこう考えることを、彼らは自分たちの見地から直観的にわれわれと反対の方向に考え

る。アベコベにしゃべる、アベコベに書く、アベコベに読む。こんなのはアベコベの序の口（abc）である。アベコベは単に表現の仕方にとどまらず、深く思考そのものに根ざしている。われわれが生れながら持っている思考は、彼等にとって異質である。一方、われわれにはどうにも馬鹿ばかしく不自然だと驚かされる彼等のやり方が、実は彼等の生れつきのやり方なのである。

濡れた傘を乾すのに先を下にしないで、柄の方を下にすることから始まって、マッチを擦るのに手前にしないで向う側に向けて擦るまで、とにかく日常のどんな些細なことでもアベコベなのである。

事実、この国の風俗習慣に従いたいと願う外国人にとって、正しいやり方はただ一つ、自分の生まれながらの直観が正しくないと命ずる方向に迷わず従うことである。

と言っても、この国の人も人類であり、そのすべてのアベコベに関らず、彼等も人間なのである。外見的にそうと認めざるを得ないが、心の働きからもそう信じざるを得ない。

よく似ていて、しかもひどく違っているので、この国の人を見ていると、まるで、自分の心をなにかイタズラ鏡で見ているような気がする。その鏡は見慣れた考えを映すのだが、どれも反対になるのだ。鏡を持っているのがイタズラッ子で、鏡に映った姿がわれわれを笑い物にするのである。しかしこれは日本でなくても、われわれの国でも同じではなかろうか。おたがいさま、鏡の中の姿は生涯われわれを笑い物にしているのではなかろうか。

毎日、鏡の中で自分の「カモ」になっていない人間があるだろうか。自分の姿を満足気に眺めているが、自分の右が左に、左が右になっているのを忘れているのである。

たまたま同じように鏡に映った友人の顔を眺めるときには、鏡の左右逆転性から友人の顔の左右釣合いが極立って漫画になっているのを見て笑わない人があるだろうか。その漫画は当の本人が無邪気にも全く気が付いていないだ

け、よりグロテスクに漫画的なのである。おそらく他人がわれわれを見るように、自分を眺めることができたら、他の国の人を見ての驚きもそう大きくはないはずである。

こうして、この極東人を単に一つの現象として見ないで、生きた人間としてみるとき、彼等の特異な考え方から新しい重要性を発見する。それを立体鏡として利用する可能性である。日本人の世界の「心の写真」を、われわれの写真の横に並べると、その合成像は一方だけのときを遥かに凌駕する結果を生じるだろう。この合成像は人間性を理解する助けになるに違いない。

また事実、このような二つの異なった像の重ね合わせによってだけ、物の本質を知ることができ、真実と虚像の区別ができる。物の世界でわれわれの二つの眼ができることを、地球の二つの東、西半球が心の世界でやってくれるのである。二次元表面のものだけが姿を変えることがない。三次元の立体はその見る位置で姿を変える。夢の世界でだけ物は平枚に見え、そこでは全てが実体を備えてはいない。

日本人が野蛮人でないことは、もちろん言うまでもない。

こんな発言が蛇足であることは承知しているが、ここでこれを繰り返すのは、とにかく世間に評判の悪いものは、得てしてその実質が良く知られていないことが多い、という理由からである。

さて今のところ、さしあたり日本人の精神の発達を認めるのに、仮りに半学位（demi-diploma）を与えこれを半開化と呼ぼう。ここでは、しかしどの部分をどう評価しているのか、などという細い点には目をつぶっているのである。

もし日本文化のある半分を挙げて、それが日本文化に不可欠であり、われわれにとっても称賛されるなら、半開化といってもよいかも知れない。しかし、これでは余りにも、われわれの側の「ウヌ惚れ」が見えすいていて、人を納得させるにいたらないだろう。

というのは日本に文化のあることの主張はなにも、われわれアメリカの芸術を補ってくれる日本からの輸出品、われわれの部屋を飾ってくれる日本紙、磁器、骨董品だけに基づいているわけではない。それはちょうど日本が輸入する燈油、マッチ、ビールなどで西洋科学が正しく代表されないのと同じである。

おそらくこの極東の国は半開化の状態といって差支えないだろう。これは現実の姿そのものより、なんとかなったはずだという姿と比較した上でのことで、比較的と言うよりむしろ絶対的のはなしである。いわば、それはわれわれ西欧と比較した上でなくて、人間の究極の可能性との比較の上で半開化なのである。いままでのところ、西洋も東洋もどちらも、すべての事について相手の基準になるほど完成されてはいない。

東西両半球へ真実の光がとどくのは、それらに固有の「心の結晶」を通してである。この二つの「心の結晶」は光線を反対方向に偏光するから、一方を通る正常光線も他方が通れなくて暗黒となる。こうして野蛮でないという見地からは、日本の文明もわれわれのものと変らない。本当の差は表面の磨きでなく、磨かれたもの自体の中にあるのである。

慎しみ深いこと、繊細なことで、日本人にかなう国民はない。この国の女主人はずっと芸術であって、科学がその主人になったことはなかった。この国民が言い寄ったのは科学でなく芸術の女神であった。芸術が広くこの国に行きわたっているのは、まさにこの理由からである。

こうして、この国では文化は限られた少数の人びとのものだけでなく、すべての人の共有財産である。知的な峰に見立つものはないとはいえ、平均した知的高原はかなり高い高度に位置する。

この国の文明を証明するのに言葉を費すことはないだろう。この国ではどこでもいる茶屋の娘さんがすでに優雅さの見本であり、ふつうの人夫が仕事のないとき暇をつぶすのに将棋をさすのである。

始めにちょっと見ると日本人は奇妙に思える。しかも、もっと良く知るともっと奇妙に見えてくる。家の中での生活をもっと知ろうとするなら、家へ入るとき帽子をとるより靴を脱ぐことから始めねばならない国だから、この敷居のところですでに、ここでは人間性を理解するのには反対側からアタックする必要があることを悟らされる。

この疑いは部屋に通されて、さて主人の心に入りこもうとするときいよいよ深まる。

まず、この人たちはいわばサカサマにしゃべるのに気が付くだろう。彼等の言うことを理解しようとしたり、反対に自分を理解してもらおうと努めるまえに、自分の考えを自然に心に浮かんでくるのと反対に、並び変えてから話す術を学ばねばならない。文章はひっくり返さねばならない。言葉の迷路に迷ってしまうのである。

言葉が伝える思想についてもそうなる。こうして、進めば進むほど全体は曖昧となり、長いあいだ方向を見きわめる苦労をしたすえにやっと手掛りを発見する。これは「もっとも不適当なのが生き残れる」（不適者生存）である。

日本の文明の中に、われわれは半分で停った進化の非常に興味深い例を発見する。難しい言い方をすれば、われわれはここに完成してしまった「民族の一生」と言う珍らしい事例に出会うのである。

われわれ西欧の見地からすると、この国民の進化は生涯の半ばで急に停ってしまったように見えるが、もっとよく観察してみると進化を完全に辿り尽くしたのだというあらゆる証拠にぶつかる。進化は停ったが、それは外部からの邪魔物によるのではなく、それはまったく自身の前進「向上」できない要因によるものである。

知的機能は破壊されたのではなく、ただ「ヘバッテ」しまったのである。この事実はとくに興味ある現象である。というのは宇宙的にいえば月―老齢のために死滅した世界―で観測できると同じ眺めが、この日本でその人間版が眺められるからである。日本社会の機能的弱点がこの文明を内部から崩壊させたのではない。悪疫が異国の蛮族の形をとって外から襲ってきたのでもない。

シナという国はただ征服されるためだけに生きてきたという珍しい例だが、それにもかかわらずに征服者は残らずその精神的な弟子になってしまう。支配者はシナ人をその王座から追い出すのだが、そのあと今度は弟子として進んでシナ人の足元に膝をまげるのである。こうして征服者はシナ文明を阻害するより、むしろそれを助成したのである。

極東のどこをとって調べてみても、その精神史は細いバリエーションはあるもののすべて同じ基調の物語りであることがわかる。シナ、朝鮮、日本はいくつかの点で違ってはいるが、その三つの歴史にはどれも同じ命の流れを辿ることができる。

それはヨルダン河の一生に似ている。

ほかの河と同じく山間の泉から湧き出るのだが、この河はその短い一生を死海にそそぐことで終わる。

極東の生命力は千年も前に枯れてしまったのである。これらの文明はその時までに高度の発達を遂げてしまい、その後はただそれを仕上げているにすぎない。

それはなにか盆栽にたとえてもよい。生長が停ってしまったので、その木は花や実を一杯つけるのに精を出している。仕上げの過程より、途中の生長過程をとばしているのである。

うわべの快適さの中で、この国民たちは生長を続けた。もちろん、われわれ西欧も特に快適さをより多く文明の概念に結びつけて考えてはいるのだが。彼等の洗練さは、ある点では西欧の標準に届かないものがあるとはいえ、その立つ未開の基盤を考慮に入れたら、われわれを凌駕している。

ロシア人をひっかくと先祖のタタール人が出てくるという諺があるが、それはもっと科学的な意味において日本人についてもいえる。粗野な先祖の子孫たる日本人が今やにぶく光る精巧な伝統の漆器に磨きをかけているは同じように真実である。実質が作られてから、はじめて表面が仕上げられるのに。

「仕上げ」（finish）という英語には二重の意味があり、本来それは「過程」と「結果」の両方について言うのだ。人真似の精神は独創のない心にいつも巣くうが、これが異様な効果を与えるべく姿を現わしている。これは自発性の欠除からの当然の帰結なのだが、もっと積極的な過去を持つ国民にとって、このやり口は不自然以外の何物でもない。

伝統的な「カラーと拍車」（中崎注：乗馬の服装としてはおかしい）の組み合わせは、この習慣が身体の都合に関係なく心理的なものであるだけ外の人には奇妙にうつる。これに近い不自然な選択が日本でもおこっている。自然の進化の秩序ある過程が、人工によって無残にも曲げられたのである。事実、この国民の知識の木が生長過程で枝が幹と不釣り合いに大きくなったのは「文化接ぎ木」の結果である。

日本人が自分たちの活動を記録に残しはじめたよりずっと前から、この国は「商品」より「アイデア」の輸入国であった。彼等はもっとも進んだ「自由貿易精神」をずっと発揮して、みずから「新品」のアイデアを作り出す努力をするかわりに、他人の「既製品」を借りるのを好んだ。

彼等はこのやり方でやって来ている。そして他人の物をよろこんで賞味するのは、相変らず日本人の特技の一つである。取り入れたものをそのまま元の古い木に接ぎ木するものだから、とても不自然で多様な外観を呈することになる。物質的なものにより傾いているとはいえ、他にも借用の好きな国民があり、それらと似ていなくもないが、日本はその取り込んだものを一度も同化しなかったという点で変っている。日本人はすでにある台木の上にただ接ぎ木をするだけである。それはここに根づき、日本独特の樹液すなわち「趣味」によって養われて繁り花ひらく。しかし接ぎ木は接ぎ木で、外からの枝は新しい樹液によって変わることは少なく、また台木そのものが変化するなどは全くない。接いであるといっても、全体からすると別の部分に過ぎないから、養い親の台木の状態をそれほど損ねることな

く剪定することもできたであろう。

接ぎ木の部分は時とともに大きく成長したが、台木の方は小さいままであった。いいかえると、この国は大人の姿にかわったが、心は子供のままであった。

このような日本について言えることは、朝鮮やシナについても言える。この三つの国民は「借用」の長い鎖の中で連結しているのである。

シナはインドから借り、朝鮮はシナを真似し、最後に日本が朝鮮の真似をした。この単純なやり方で三つの国は次ぎ次ぎとそれらのどの国のものでもない文明を持つことができた。

自分のものでないものを掠めとるときの熱心さ、とったものを楽しむことに示すこの上もない満足さ、これらを見るにつけ「その日暮らし」のお人好しを思い出さずにはおられない。この人たちは生きるために働くことより、怪げな借金に頼って生活するのが好きな階級の人びとなのである。

このお人好しと同じように、極東の人びとは今は利益を挙げているように見えても、最後には元金のないために高い金を払わされるようになるのは当然である。

こうして極東の文明は社会の諸元素のちゃんと結合した化合物より、むしろ機械的混合物に似ている。ひどく雑多なものが、歴史の釜の中に投げ込まれたのだが、親和力がないから結合していない。結合力が欠けているのである。

なにかをつくり出し進化させる能力は極東人の目立った特性ではない。自発的に変化する、これが進化のやり方であるが、この進取の気象はこれらの国ではとうに消え失せてしまった。早く目醒めたのだから無理もないが、遙かな「曙の国」の住人たちは寝むたそうな顔をして、まだお昼になっていないのにもう一仕事すんだ気になっている。彼等は若いままに年老い、それからほとんどそのままである。

彼等の底にあるものは数世紀前も今日も同じである。過去二十年あまりの西欧の影響を取り除くと、どの人も自分の曽祖父とほとんど同じである。民族としての特性は本質的には変っていない。

しかし過去に、この国の人びとを他から区別していた特性が、次第に消えてなくなりつつあるのも事実である。

そして、この国民の履歴を汚すように作用した性格の中で、もっとも大きいものは「没個人性」(impersonality)（中崎注：ここで始めて「没個人性」が登場する。以下には「個人性」とともに括弧に入れて強調する）という大きな特性である。

地球の温帯にその南北端がある等温線で限られる地帯をとると、この幅の半分以内の比較的狭い範囲の中に、過去から現在までの有名な国のほとんど全部が入ることがわかる。そしてこの地帯を眺め、それぞれの部分を比較してみると、ある顕著な傾向に驚かされるだろう。

「そこに住む人間は西に行くほど次第に個性的（personal）なのである。」

この心の傾向はあまりに顕著であるから、これは住む人間のせいでなく、なにか宇宙的な原因でもあるかと疑いたくなる。赤道の黒から極地のブロンドまで、緯度によって人間の髪の色がかわるのと同じくらい規則的である。これと同じように自己を自覚する度合は、沈む太陽を追って西へ行くほど強まり、朝に向って東に進むほど次第に確実に色あせてしまう。

アメリカ人、ヨーロッパ人、中近東人、インド人、日本人と、この順に、あとほど「個性的」でなくなる（less personal）。われわれは物差しのこっち側におり、極東の人はあちら側にいる。われわれにとって「自分」（I）が心のまさに核だとすると、極東の人の心ではこれが「没個人性」といえるのかも知れない。

この特徴は事柄自体として奇妙であるが、これから派生することの原因として余計に興味がある。特殊なケースと

してこの人びとにあることが、人類一般について示唆することが多いからである。現実ではそううまく行かなくても、理論としては成功するかも知れない。多分われわれ自分を理解するのに役立つかも知れない。ややこしい形而上学の問題には役に立ちそうにもないが、社会学の研究としては役に立たなくもないだろう。

さてここで、いつもわれわれと共にある、一つの物（a thing）について考えてみよう。

それを考えるのは特に時宜を得たものと言えよう。それと言うのも、それは現在のもっともさし迫った問題の底に横たわっている物だからである。

西欧世界が現時点で直面している二大問題の両方ともに、その解決を求めてそこへ戻って行くのである。考える人間を沈黙させるまがまがしい不可知論、そして考えない人間の苛立たしい叫びである社会主義、共産主義、ニヒリズム。これらは究極のところ、共にその正当さの理由を「個の意識」なるもの（sense of self）が真実なのが幻想なのかにおいている。

もし「個人性」（individuality）（中崎注：ここで初めて「個人性」が登場する）などと言う物が本当の実在（actual thing）でないなら、また感覚（feeeling）と呼ばれる物が仏教徒が教えるように、ふとした幻想に過ぎないなら、それに基礎をおく全ての信念（faith）は回ぐる万華鏡の中の絵のように消えてしまう―それは現れては消える夢の中の走馬灯よりもはかない。

もし個（ego）が物質的な脳をかすめる影に過ぎないのなら、この脳の灰白質が分解してしまえば、一体われわれはどうなるのか。われわれは、ただ自分たちを取り巻く広大な宇宙の中の、目にも止まらない極小部分として消え去って行くのであろうか。

われわれは、このような考えに耽って、知識の広い海の岸辺に立って、目を凝らしているに似ているが、ただ見え

るのは迫り来る霧だけである。それは懇願する手にも似て、沖に向かって差し伸ばされた希望の岬をさえも、視界から遮っている。

現実的（materially）に見ると、もっとそうなのだ。

もし「個人性」が心の幻想に過ぎないのなら、ふつうの人間に努力を強いるだけの強い動機が、どうして心の中に湧くのだろうか。なるほど科学者たちであれば、人類の進歩のためだと言うので、相変わらず仕事をするかも知れない。しかしふつうの人間の方は、公共の利益のためだけと言うのでは、その内に懸命に努力をするのを止めるだろう。

このように「個人性」からの刺激を取り去れば活動はすぐにも麻痺する。

と言うのも、一般の人にとっては、個人的な利益を増すことだけが、努力をするための刺激になるからである。この力を消し去れば、動機はなくなるのだから、社会主義が正当化されるだけでなく、それがたちまち生活の規範（axiom）その物に成り上がる。

こうなると、単位は共同体その物で、それはこれ以上に分割できない原子となる。こうして、社会主義、共産主義、ニヒリズムと続くのは必然である。

彼らの無気力な「没個人性」にもかかわらず、極東の人びとですら、まだここまでのゴールに到達していないのは、あるいは「個人性」なる物が実在する（a fact）と言う証拠になるのかも知れない。

しかし、先ず最初にこの「個人性」なる物について、われわれ自身は何を知っているのか。

大変に考え深い子供では、非常に早い時期にある事（event）がおこる。それは子供にとっては、回りの事すべてを無意味にしてしまうほどの出来事なのである。それは行動と全く結びつかないから、そとから気付かれたり、記録に残されたりはしない。しかも、それは子供にとっては一大事（epoch）なのである。それはひどく個人的（individual）

なものだから、子供はそれを公言したがらない。しかも実際にはどこにもある事柄だから、その影響を受けない人間はいないだろう。

純粋に主観的（subjective）で、外界からの刺激よりずっと強烈である。純粋に人生の機微に触れて、偶然の運命などより衝撃的である。この個人的（singular）であると同時に、どこにでもある少年の経験とは、ある日に突然ひらめく彼自身の「個性」（personality）に他ならない。

少年は目覚めに近い感覚を経験することがある。それは自己開発にいままで役立った感動（sensation）が、感性（sensitiveness）に入れ変わり、五官から得られた知識が常識と呼ばれる知的な知恵（wisdom）と融合する時期にである。

突然に彼は自分を意識し始める（conscious of himself）。その意識はなにか薄気味悪い。これまでは、ただ物（matter）だけだったのに、初めて心（mind）を意識するのである。前もって知らされず、準備もないまま、彼は急に自分自身（being himself）の前に連れて行かれ、そのまえに脅えて立ちすくむ。

自分自身のアイデンティティー（identity）に出会うのが、そんなにびっくりするほどの事だとしたら、この奇妙なお付き合いがこれからも続くのだと考えると落ち付かなくなる。そのとおり続くのであり、求めもしないのに付いて来て、払っても落ちない。ちょうど影法師のように逃れられない。人間は自分自身と仲良くする外ない。このもう一つのエゴは長年の間人間を悩ます。彼はこれを自分だけに特有な変屈な癖だと思い、言うと馬鹿と思われはしないかと恐れて、他人に打ち明けようとはしない。この常時に付きまとう幽霊（ghost）とふつうに付き合う事を覚えて始めて、人間は他人も自分と同じような親類を持っているのに気が付くようになる。

時として、この意識の夜明けの前に、ながく心の目覚め（soul-awaking）の曙が続くことがある。だがもっと敏感

で繊細な個人のときには、光は赤道直下の日の出のように急に射しはじめ、心の眼に自分のなかに潜む思いもかけない世界を暴きだす。

どのように目覚めるにせよ、「個性」の感覚（sense of personality）はそれと気付いたときにはすでに、神話の知恵の女神（中崎注：ギリシャ神話のアテネ女神）のように頭の中では完全に成長しきっているのである。

初めて自分を振り返ったときから、人間はあとで他人にとってそう見えるように、すでにもう年寄りだと思うものだ。われわれは、歳をとるにつれて、知識、知恵、経験が増える。しかし、われわれの心の奥底では変わりがないのだ。確かに人びとは以前より敬ってくれるようになる。しかし、自分たちは全然変わらなかったのではないかと疑う。次ぎの世代の少年たちが自分たちを尊敬してくれるときに、心の奥底で微笑させられることがある。自分たちは彼らとほとんど変わらないのにと思うからである。彼らはそれを知らないだけなのだ。

心の底で、初めて自分自身を実感した遠い日のあの朝から、われわれは何の変化も意識していないのだ。われわれは相変わらず若いと思っている。自分自身では何も変わっていないと考えているのに、世間が差別するのを面白がるだけである。

このようにして、誰もが「二度生まれる」。はじめは物質として、次ぎには心で。この第二の誕生は人類だけの生まれながらの権利ではない。高等動物ならおそらく全部、もっと下等な動物ですらも、このような個人的アイデンティティー（individual identity）の実感を体験するのだろう。いずれにしても、人類なら全ての民族に、この啓示はやってくる。ただ、その力を感じる度合いがひどく違うのである。

無気力で運命論的なトルコ人と、精力的で神経質なアメリカ人とでは全く別なのだ。真実、想像、信念のどれをとっても、その感じにどれだけの広がりがあるかがわかる。彼らにとっては内省的な「なんじ自身を知れ」（γνῶθι σέαυτον）

も自意識を駆り立てることはない。しかし、われわれにとっては、悪魔にとりつかれた昔の人のように、それは脅かし窮地に追い詰めるのだ。この常時につきまとう好ましくない分身の存在は証明するまでもあるまい。それはしばしば祝宴の最中に招かれざる役を演じるが、その存在は不幸な犠牲者のほかは誰も気が付かないのである。

この自分自身のアイデンティティーと言うつきまとう恐怖は、クネルム・チリングリィ（中崎注：Kenelm Chillingly は Bulver Lyttonの小説の主人公）の、もともとなんでもない呪いに較べても平凡なものである。

逆説的に聞こえるかも知れないが、主に子供時代に特有なあの孤独さが、この友人を呼ぶのである。誰にも打ち明けられない考えにとり憑かれるほど孤独なことはないからである。さらに逆説的なのだが、自分の個性をよろこんで、他人のそれと取り替えたいと願う人間がいるだろうか。自分自身でなくても良い、と考える人間がいようか。いや、それどころか容貌にさえも固執しない人間があろうか。だれしもが欲しがる物のすべてを、持っていない貧乏人ですら、なにかの拍子に隣人と間違えられてカンカンに怒らないことがあろうか。確かに、この人類の根の深い、拡がりの広い本能の中には、幻だけでない何かがあるに違いない。しかし、いかにこの自分の「個人性」(one's individuality）を強く確信するにせよ、これが現世を超えて続くという保証はあるのだろうか。

それは死の朝に目覚めて、そこで分かるのだろうか。それとも、それを宿している肉体と同じように分解して、目にも見えない魂（spirit）の塵に戻るのだろうか。現存する自身の自覚に踵を接して、この影のような疑いがあとあとまで付きまとう。このスフィンクスの不気味な謎を解くのに比喩が役に立つだろうか。

物質について真実だとわれわれが学んだ法則が、心についても真実なのだろうか。われわれの知る物質は不滅である。だが、かつてはあれほど身近だったその形も消えては返らないではないか。霊（soul）も同じ運命を辿るのか。心（mind）が消滅してしまうとは、物質がその存在を止めると同じように考えられもしない。

現在われわれの回りのどこにも、その存在が感じられる魂（spirit）は、永遠の過去からあったし、永遠の将来もあるだろう。だがその一小部分で、自分が自己（self）として知っている部分は、空から落ちてくる雨の滴に似てはいないのだろうか。雲から離れるときも区別できない粒子なのだが、その行き先である大洋の中でも見分けが付かなくなってしまう。

その「個性」（personality）とは、一方の広大な「没個人性」（impersonal）から、他方の同じように広大な「没個人性」に移る過渡的な姿に外ならないのか。

このように過去の予言者は教え、また現代科学もそうらしいと言う。この考えはわれわれにとって物質科学の苦い果実のように見える。しかし予言者にとっては、自分の信仰のもっとも美しい花だと見なされた。現在は無神論の不遜な考えとして恐れられている物が、四千年前では信仰の聖なる教義と謳われたのである。

人間が直接にそれと知る魂の一生（soul's life）は七十年の生涯より短い。人間が自覚する自己自覚の期間は、二つのぼんやりした「没個人的」（impersonal）状態で区切られている。一つは少年期のあの発見に先立つ幼児期であり、もう一つは年とともに加わる暗闇である。二つの薄明が彼の一生のこの境界を縁どるのだ。ところが極東人にとっては一生が薄明である。というのは、日本とシナにおいては両方の状態が共存しているからである。そこでは現在の小児期の無意識の状態が、来たるべき老人の無意識への確信とともにある。この二つは分かち難く混り合っているので、一方の分身は他方と結合するに当たって、信用状を携行しているのではないかと思うほどである。

個性的（personal）で進歩的な西欧が誤っていて、「没個人的」（impersonal）で無感情な東洋が正しいのだろうか。とんでもない。

地球の反対では、ちょうど時差が進んでいるように、心の発達もわれわれより進んでいるのだろうか。それとも、

われわれの昼が彼らの夜であるように、彼らはずっと後方にいるのだろうか。その予定された早熟というより見掛けの知恵のために、彼らはとても遠くには行けないのではなかろうか。

長い洋上航海のブランクのあとで、急にこのような文明に出会うと、人間はある人の驚きを本能的に思いおこす。その人は晩饗のあとで寝こんでしまい、いたずら好きの友人たちが面白がって、帰り道に墓場に一晩おきざりにしたのである。ひとりで目覚めたあと、まだぼんやりした気分で驚いてあたりを見回す。そして二、三回なんとなく目をこすり、最後に厳かな確信をこめてつぶやく。

「さてと、おれは誰よりも早起きなのか、ずっと遅れているかのどちらかだ。」

進化の自然な過程を辿り損ねたのが、極東人を死に追いやろうとしているのかどうかは別として、彼らは今でもわれわれが出発したところからそう遠くない地点に留まっている。彼らはまだ、自己意識が甘美な自然の単純さを汚さないまえの、子供と同じ発達段階にある。「没個人的」民族は決して大人になることはないのだ。

この極東人のもっとも際立った性質、すなわち「没個人性」は、一方でも自分自身のために、他方ではわれわれのためにも、特別に注目に価する。というのは、それがわれわれについての稔り多い考察を、間接的に教えてくれると同時に、直接的には現代の第八不思議とも言える、この文明の奥深い底にそれが潜んでいるからである。

これは、この人びとの現在と過去、そして将来どのようになりたいのかを知ることによって理解できる。

賢い人が見ると、歴史的というよりむしろ心理的に観察して、一粒のドングリの中にその実以外に、二本の樫の木が見えるはずである。実がそれから落ちた木と、実から生えてくる木とが。

これらの三つの状態、すなわち潜在的な過去、現在、そして未来は、民族の性格から生まれた三つの特殊な生産物の中に観察され研究されるだろう。言語、日常生活の考え、それに宗教がそれである。言葉にはある民族の過去の心

(spirit) がミイラになっている。日常生活の考えには、それが芸術であれ科学であれ、その中に現在の生活その物が内蔵されている。そして宗教の中には未来への夢がこめられている。

極東ではこれら三つの主題から「没個人性」が顔をのぞかせ、われわれを正面から見つめるのである。

極東の性格はこの特質に基礎をおいている。私が今から見ようとするのは、国民全体だけではなく、一人ひとりなのである。私が見ようとしているのは、世界発展の波の中の一粒子の運動であって、波自身の進行ではない。全体の動きについての結論は部分の運動からひとりでに知れる。

この主題を詳しく調べるまえに、しばらくこの人間をその社会との関係から眺めてみよう。この観察からこの民族にひろく行きわたっている、「没個人性」の奇妙な雰囲気が理解できる。われわれ西欧世界では、その人がどんなに賢明さ、品性、想像力に欠けていようとも、その人の存在が認められたら、一生のうちに三回は活字になる。

その人の一生がそれほど重要でなかったとわかるほどに形式的なものだが、とにかく誕生、結婚、死はちゃんと活字で記録される。

生まれについて言うのは、確かにイギリス社会にかぎって貴族の特権である。民主的なアメリカでは全ての人間は生まれながらして、自由で平等という理由から、この最初の出来事（中崎注：生まれ）は当然のことながら無視され、あとの二つの出来事だけが問題にされる。これらについてわが賢明なる国民は、どうでもいい平等などは主張しないのである。

わが国の新聞が記録するこれら三つが、平凡人の生涯の公平な要約と認めたうえで、次ぎにある極東民族の生涯における、これら三つの重要な出来事を観察してみよう。

文献と注

(1) この概要はすでに次ぎに発表してある。中崎昌雄「森鷗外『与謝野晶子論』とPercival Lowell」大阪大学図書館報、第一八巻、第五、六号、一九八五年二月。名古屋科学館友の会、第四巻、第一号、昭和六〇年五月、八頁。

(2) 「鷗外全集」岩波書店、昭和四八年（いわゆる戦後第二版と呼ばれる物で以下に「鷗外全集」と略す）第二六巻、四三三頁。

(3) 杉森久英「滝田樗陰―ある編集者の生涯」（中公新書）中央公論社、昭和四一年一一月。

(4) 「芥川龍之介全集」第九巻、岩波書店、一九七八年四月、二四頁。

(5) 中崎昌雄「『晩年の父』鷗外と『観象』」近畿化学工業界、七月号、一九八四年、一〇頁。女性文芸誌「とぽす」第二号、一九八五年、四頁。

(6) 「鷗外全集」第三五巻、八二四頁。

(7) 小堀杏奴「晩年の父」（岩波文庫）岩波書店、一九八一年九月。

(8) 「鷗外全集」第一五巻、五四五頁。

(9) 「鷗外全集」第二三巻、四八四頁。

(10) 「樋口一葉全集」第三巻（上）、筑摩書房、昭和五一年一二月、四八一頁。

(11) 「鷗外全集」第四巻、四五七頁。

(12) 「鷗外全集」第三巻、三三頁。

(13) 森潤三郎「鷗外　森林太郎」森北出版、昭和一七年四月、一〇二頁。

(14) 小堀桂一郎訳、解説「森鷗外の『智恵袋』」（講談社学術文庫）講談社、昭和五六年八月。

(15) 吉野俊彦「鷗外―逆境の人間学」グラフ社、昭和五八年一一月。

(16) 明治三五年二月八日付賀古鶴所宛の手紙。「鷗外全集」第三五巻、一四九頁。

(17) 夏目鏡子述、松岡譲筆録「漱石の思い出」（角川文庫）角川書店、昭和四一年三月、一三六頁。

(18) 「漱石全集」第二巻、岩波書店、一九八三年四月、二三四頁。

(19) 「鷗外全集」第五巻、八六頁。

(20) 文献（17）、一六八頁。

(21)「鷗外全集」第四巻、一二七頁。
(22)平野万里の年譜は次ぎを参考にした。「與謝野晶子・鉄幹集」（明治文学全集）筑摩書房、昭和五二年三月、四〇三頁。
(23)森於菟「父親としての森鷗外」（筑摩叢書）筑摩書房、一九八一年一月、二二五、二三〇頁。
(24)「鷗外全集」第三五巻、四〇六頁。
(25)「石川啄木集」（明治文学全集）筑摩書房、昭和五二年三月、三三五頁。
(26)絲屋寿雄「菅野すが」（岩波新書）岩波書店、一九八〇年一月。
(27)「徳富蘆花集」（明治文学全集）筑摩書房、昭和五二年三月、三六九頁。
(28)平塚らいてう「元始、女性は太陽であった」上巻、大月書店、一九七一年一月。下巻、一九七一年九月。「続・元始、女性は太陽であった」一九七二年十月。「元始、女性は太陽であった—完」一九七三年一一月。
(29)瀬戸内晴美「青鞜」（中公文庫）中央公論社、昭和六二年五月。
(30)文献（17）、一八五頁。
(31)「鷗外全集」第三八巻、三二二頁。「明治女流文学集」（明治文学全集）筑摩書房、昭和五二年三月、一五九、四三二頁。
(32)「鷗外全集」第三五巻、四八九頁。
(33)「森鷗外集（一）」（現代日本文学大系）筑摩書房、昭和五三年三月、四一二頁。
(34)「鷗外全集」第七巻、三八一頁。
(35)「鷗外全集」（妄想）第八巻、二一三頁。
(36)「鷗外全集」第三五巻、五一二頁。
(37)瀬戸内晴美「田村俊子」（角川文庫）角川書店、昭和五八年一二月。
(38)高田宏「言葉の海へ」（新潮文庫）新潮社、昭和五九年一月、二五四頁。
(39)平塚らいてう「元始、女性は太陽であった—完」大月書店、一九七三年一一月、一〇二頁。
(40)「鷗外全集」第一六巻、四七七頁。
(41)「鷗外全集」第一六巻、六四五頁。
(42)「鷗外全集」第三五巻、五四六頁。

(43) Abbot Lowrence Lowell, *Biography of Percival Lowell*, Macmillan, New York, 1935（以下に「ローエル伝」と略す）。
(44) *Dictionary of American Biography*, **6**, p 468.
(45) *Dictionary of Scientific Biography*, **8**, p 520.
(46) 佐伯恒夫「火星とその観測」恒星社、昭和三三年一二月、五二頁。
(47) 横尾広光「パーシバル・ローエルと火星文明論」杏林大学医学部教養課程研究報告、第三巻、一九七六年、四九頁。なお次ぎの論説にはローエルの日本における行動が表になっていて便利である。横尾広光「パーシバル・ローエルと日本文化論」同誌、第四巻、一九七七年、六七頁。
(48) E・S・モース著、近藤ら編訳「大森貝塚」（岩波文庫）岩波書店、一九八三年一月。E・S・モース著、石川欣一訳「日本その日その日」全三巻（東洋文庫）平凡社、一九八〇年七月。
(49) E. S. Morse, *Mars and Its Mystery*, Little, Brown & Co., Boston, 1906.
(50) 「モースの見た日本」小学館、一九九八年七月。
(51) 「ローエル伝」九頁。
(52) 「鷗外全集」（妄想）第八巻、一九九頁。
(53) この翻訳は次ぎにある。伊吹浄編「日本と朝鮮の暗殺」公論社、昭和五四年一二月。
(54) P. Lowell, *Chosön, The Land of the Morning Calm*, Ticknor & Co., Boston, 1886.
(55) 「鷗外全集」（妄想）第八巻、二〇七頁。
(56) P. Lowell, *The Soul of the Far East*, Houghton, Mifflin & Co., Boston, New York, 1888.
(57) この翻訳は文献（53）にある。
(58) 犬塚孝明「薩摩藩英国留学生」（中公文庫）中央公論社、昭和四九年一〇月、一五六頁。
(59) P. Lowell, *Noto: An Unexplored Corner of Japan*, Houghton, Mifflin & Co., Boston, New York, 1891.
(60) 邦訳は次ぎにある。なおこの本の解説にはローエルの簡単な年譜がある。ローエル著、宮崎正明訳「能登—人に知られぬ日本の辺境」パブリケーション四季、一九八一年四月。
(61) *The Writings of Lafcadio Hearn*, Houghton, Mifflin & Co., Boston, New York, 1922（一九八八年臨川書店複刻版）（以

下に「ハーン全集」と略す）第四巻。

(62)「ハーン全集」第一四巻、八六頁。

(63)「ローエル伝」三七頁。

(64) 高梨健吉監修、Basil Hall Chamberlain, *Things Japanese*（以下に「チェンバレン日本誌」と略す）（第六版、一九三九年）名著普及会、一九八五四月、六六頁。この翻訳は次ぎにある。チェンバレン著、高梨健吉訳「日本事物誌」全二巻（東洋文庫）平凡社、一九八〇年四月。

(65) 文献（47）「パーシバル・ローエルと日本文化論」八二頁。

(66)「ハーン全集」第一四巻、一二九頁。

(67)「ハーン全集」第一五巻、三二七頁。

(68)「ハーン全集」第一四巻、一三二頁。

(69)「ハーン全集」第一四巻、一三九頁。

(70)「ハーン全集」第一五巻、三三五頁。

(71) P. Lowell, *A Comparison of the Japanese and Burmese Languages*, Asiatic Society of Japan, **19**, 583 (1891).

(72)「ハーン全集」第一五巻、三四九頁。

(73) P. Lowell, *Esoteric Shintō*, Asiatic Society of Japan, **21**, 106, 152, 241 (1893); **22**, 1 (1894).

(74)「ハーン全集」第一四巻、二二三頁。

(75)「ハーン全集」第一四巻、二五七頁。

(76)「ハーン全集」第一六巻、一〇八頁。

(77)「ハーン全集」第一六巻、一九六頁。

(78)「ハーン全集」第一六巻、二五五頁。

(79)「チェンバレン日本誌」二九六頁。

(80) H. C. King, *The History of the Telescope*, Dover Pub. Inc., New York, 1979, p336.

(81) P. Lowell, *Occult Japan; or The Way of the Gods, An Esoteric Study of Japanese Personality and Possession*, Houghton,

Mifflin & Co., Boston, New York, 1894.

(82) L. Hearn, *Glymptses of Unfamiliar Japan*（「ハーン全集」第六巻）。この翻訳は次ぎを見よ。平井呈一訳「日本瞥見記」（全二巻）恒文社。

(83) P. Lowell, *Mars*, Houghton, Mifflin & Co., Boston, New York, 1895.

(84)「ハーン全集」第一四巻、三〇九頁。

(85)「ハーン全集」第一四巻、三一五頁。

「小泉八雲全集」第一一巻、第一書房、昭和二年七月、一六五、一六七、一七四頁では火星のことが「マルス」「マルス論」などと訳されている。

(86)「ハーン全集」第一四巻、三一九頁。

(87)「ハーン全集」第六巻、三八五頁。

(88) Norman & Jeane MacKnzie, *H. G. Wells*, Simon & Schuster, New York 1973, p128.

(89)「ハーン全集」第十二巻。

(90) ラフカデオ・ハーン著、柏倉俊三訳注「皇国日本—解明への試論」（東洋文庫）平凡社、一九八二年一〇月。

(91) P. Lowell, *Mars and Its Canals*, Macmillan Co., New York, 1906.

(92)「ローエル伝」一四九頁。

(93) P. Lowell, *Mars as the Abode of Life*, Macmillan Co., New York, 1908.

(94) P. Lowell, The *Evolution of Worlds*, Macmillan Co., New York, 1909.

(95) *Dictionary of Scientific Biography*, **8**, p523.

(96) E. Burgess, *To the Red Planet*, Columbia Univ. Press, New York, 1978.

(97) ニュートン別冊「太陽系のすべて」教育社、一九九〇年六月。

(98)「ローエル伝」一〇三頁。彼は「トネリコ」の新種を発見したと言われている。

(99)「ハーン全集」第七巻。

(100) ラフカディオ・ハーン作、平井呈一訳「心—日本の内面生活の暗示と影響」（岩波文庫）岩波書店、昭和二六年二月。

(101)「鷗外全集」第二六巻、三九一頁。
(102)「鷗外全集」第三五巻、五六一頁。
(103)「鷗外全集」第一〇巻、五七三頁。
(104)「鷗外全集」第三八巻、四九七頁。
(105)「鷗外全集」第二六巻、五〇八頁。
(106)「鷗外全集」第四巻、三四五頁。
(107)「新釈源氏物語」序、「鷗外全集」第三八巻、二五三頁。
(108)星新一「祖父・小金井良精の記」（星新一作品集、第一八巻）新潮社、昭和五五年八月。
(109) *Japanese Design Motifs*, Dover Pub. Inc., New York, 1972, p36;「ハーン全集」第五巻、三〇〇頁。
(110)ローエル著、川西瑛子訳「極東の魂」公論社、昭和五二年七月。
(111)「小泉八雲全集」第八巻、第一書房、昭和二年五月、五〇九頁。
(112)「ローエル伝」一八頁。
(113)粟田、古在田編「岩波哲学小辞典」岩波書店、一九七九年一一月、三一〇頁。ここには次ぎのようにある。「個性（英、individuality）―個体、とくに個人にそなわる特殊、独自の性質をいう。」
(114)牧健二「西洋人の日本歴史観」弘文堂、昭和二五年九月。
(115)文献（56）、二二頁。
(116)「チェンバレン日本誌」二九七頁。
(117)「ハーン全集」第一二巻、一七九頁。
(118)「福沢諭吉全集」第二〇巻、岩波書店、昭和三四年六月、一七七頁。
(119)清水幾太郎編「コント・スペンサー」（世界の名著、第三六巻）中央公論社、昭和四五年二月、三一頁。
(120)スペンサー著、沢田謙訳「第一原理」（世界大思想全集、第二八巻）春秋社、昭和二年三月。
(121)ガルブレィス著、都留重人監訳「不確実性の時代」TBSブリタニカ、一九七八年二月、五六頁。
(122)「ハーン全集」第一二巻、四五九頁。

(123) 「ハーン全集」第一五巻、二二五頁。
(124) 「ハーン全集」第一五巻、二四四頁。
(125) 「ハーン全集」第一二巻、四三四頁。
(126) S. L. Gulick, *Evolution of the Japanese—Social and Psychic*, Revell Co., New York, 1903, p. 102.
(127) 文献（15）、二二六頁。
(128) シュペングラー著、村松正俊訳「西洋の没落」全二巻、五月書房、昭和四六年三月。
(129) H. von Samson-Himmelstjerna, *Die gelbe Gefahr als Moral Problem*, Deutsch Kolonial-Verlag, Berlin, 1902.
(130) 「鷗外全集」第二五巻、五四九頁。
(131) P. Lowell, *The Soul of the Far East*, new illustrated ed., Macmillan, New York, 1911. これは一八八八年版に三十二枚の挿絵、写真を加えただけの物である。本文その物は全くそのままで、活字も組み変えられてはいない。
(132) 「病院横町の殺人犯」「鷗外全集」第一一巻、五四三頁。
(133) P. Lowell, *Die Seele des Fernen Ostens*, berichtigte Übersetzung von Berta Franzos, E. Diederichs, Jena, 1911.
この本の見返しには「BARA NO HANA NI」と一行書いてある。
なお「個人性」は「Unpersönlichkeit」（一一ページ）、「没個人性」は「Individualität」（一二ページ）となっている。
(134) 鷗外のドイツからの新刊書購入や、ドイツ新聞予約購読の事情については次ぎを見よ。小堀桂一郎「鷗外の訳業（一）—『諸国物語』まで」「鷗外選集」第一四巻、岩波書店、一九七九年一二月、四〇一頁。